昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十七年五月十五日印刷納本
昭和十七年六月一日發行（毎月一回一日發行）第三十七號

特輯　北京の市民生活

現地編輯

6

北京の市民生活

胡同

黒い灰色の壁が兩側に長く續いてゐる狹い北京の胡同は、元來、壁の好きな自分には實に魅惑的なものだつた（中略）美しい門を見ると何時も、その內に自分とは全く違つた生活をして住んでゐる人々を想像して旅行者としての感傷にうたれる

この門の一つが突然開いて、誰か美しい女でも、女中達に見送られて出てくればどんなに素晴らしいだらうなどと思つてゐたら、思ひがけない所に曲り角があつたらしく、そこから藍衣の少女がひよつこりと出てきた。身體の

恰好から何んだか素晴らしい女の子のやうに思はれたが、近づいて見ると果して素晴らしい姑娘だつた。十三四歳ぐらゐだつたらうが、ちよつと使ひに外出したといふやうな無雜作な風で左手に瓶をさげて歩いてゐた。すらりとした肢體に藍衣がぴつたりとあつて小麥色ののびのびした腕は輝くやうに美しかつた。しなやかな歩きぶりは、その土地や胡同に、全く板についてゐた私はここに支那の優美さを全部見せつけられたやうに思つた。勿論、少女は私にこんな喜びを與へてゐると知る由もなくすれちがつて、去つて行つた。私はその姿が見えなくなるまで見送つた。北京を思ひ出す限り、彼女は私にとつては忘れ得ない姿になるだらうと思つたので…

旅行者の氣持といふものは單純なもので、最初に二三人の美しい女に遭へばもうその土地が好きになつてしまふものらしい。しかし考へて見ると、これは單に一少女が美はしかつたといふやうなことでない。一人の女の子が、その土地に調和して非常に美はしいといふことは、その背後に何百年何千年かの人間の努力や苦心が堆積されてゐてそれがその女の子に浸みこんで美の姿をとつてゐるものであると思ふと、一少女の美もさう單純なものではないらしい

三雲祥之助—『亞熱帶風な思念』の中「北京の胡同と姑娘」より

北京の或る文人の住宅の院子（中庭）

北京の市民生活

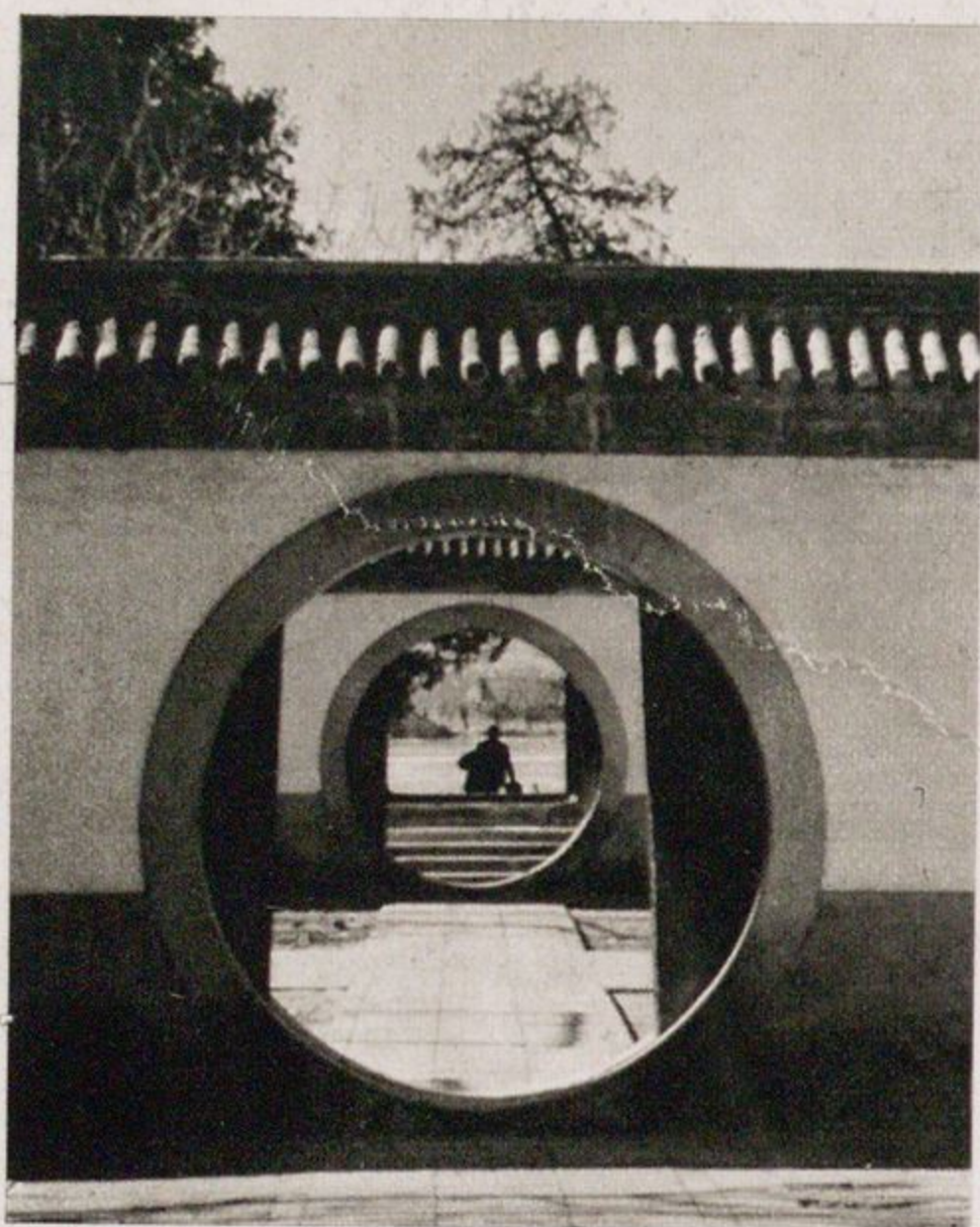
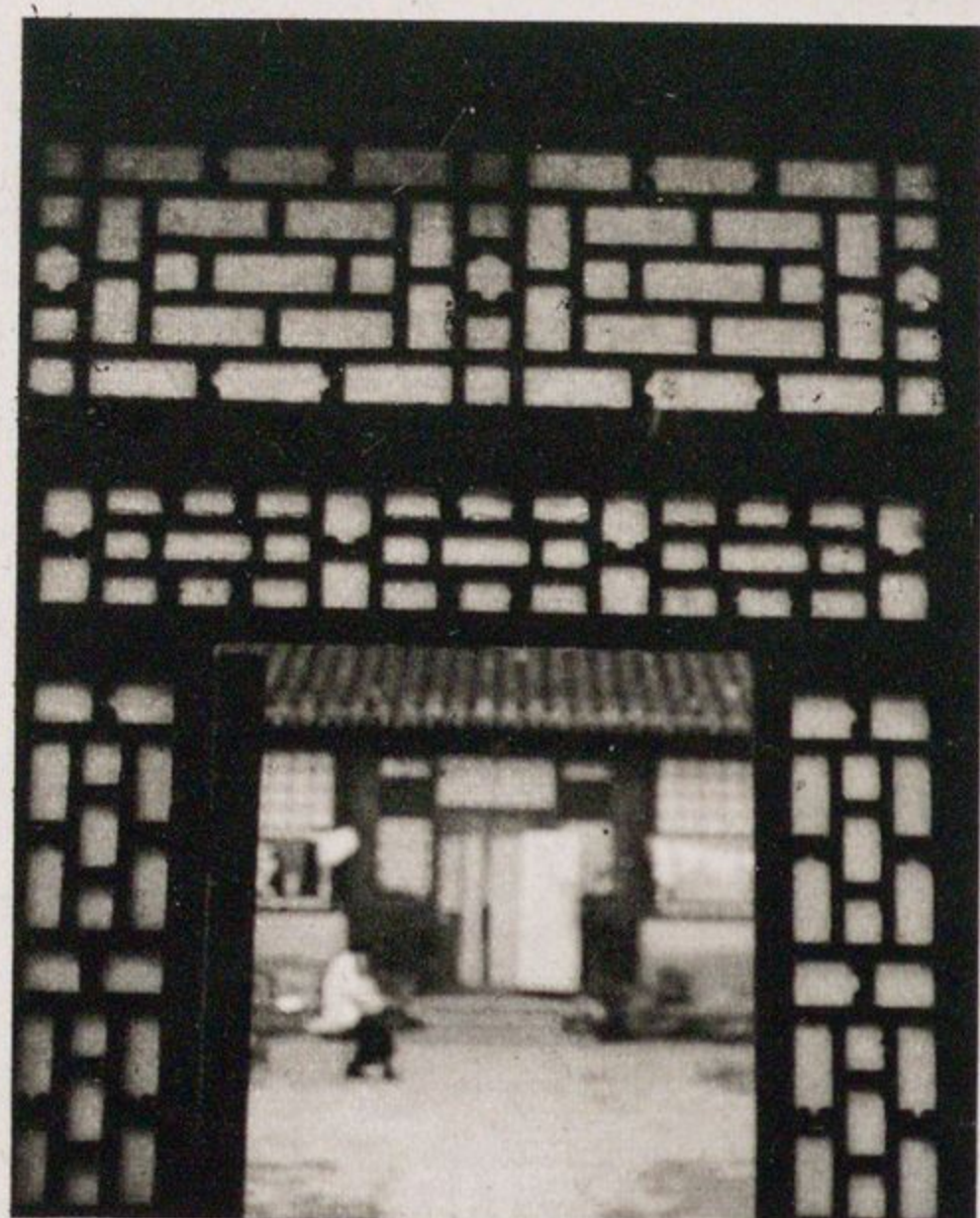
住居　一

天津を見た後で北京の驛に降り立つとまるで違つた街の景色にびつくりする第一空が明るい。それは天津みたいな大厦高樓がなく、よく植ゑられた並木の間から廣い視角に入つて來るのです北京は外城はともかくとして内城では殆んど二階建の家がない。前清時代に天子行幸の際、これを見下す不敬を防ぐため二階建を禁じたと云ふ俗說は本當だらうと思はれます

門の金具、垂れた金具をたたいて呼鈴の役もする、右は鐶、左は眞鍮

門二種

通用門

花隔子様子

院子の生活

北京の市民生活

住居 二

さて北京の地圖を見たら分るやうに四角な城壁に圍まれた內城の街は宮殿を眞中にして碁盤目式の道路を通じ、東西南北の方角は明瞭なものです。故に胡同（露地）を形作る個々の家も亦方角に於てはおほかた見易い正位置を保つてをります

北京の家は周圍は灰色の煉瓦塀を繞らして日本のやうに開放的なところがなく、道路から家庭の樣子を眺めること

院子の生活

は出來ません。これは戰時の掠奪を防ぎ、平素は盜難豫防と云ふこともありませうが、又この塀は春先の黃塵を防ぐことにも役立つのです

屋根の形は切妻式と云ふ正面に見たら⌐字形、横から見たら將棋の駒の形になる、ゆるやかなへの字なりに圓筒を並列したやうな屋根瓦の眺めは一種獨特の印象を與へます

一般に漢民族の住宅は原則として南向に建てる、全體各棟の配置を平面圖にとるならばほぼ亞の字形になります。

正面の入口には街門（正門或は大門とも云ふ）があり、その兩側には門房と云ふ看門的（門番）その他に用ひる一棟が附いてゐる。街門を入つたところに衝立みたいなものがあるのは影壁と云ひます。その中は院子（庭）になつてゐて、突當りの正面に一番大きな一棟、即ち正房があります

その左右兩袖のやうにあるのが廂房、即ち東廂房と西廂房です

正房は主人（向つて右）主婦（左）の居室、廂房には家族子女が住むと云ふ形になり、これを單位として大家族主義のことですから、大きくなれば後方に又院子を設け同じ形式の幾棟かを足し（廊下でつなぐ）一番奧に後單房（下女や妾の居室）を置くと云ふことになります

一家こぞつて餃子（肉饅頭）をつくる。これは大衆家庭料理としては第一級品である。

向うは炕のある部屋、衣裳函、行李などが見える

北京の市民生活

住居 三

門房と正房と後罩房と並列するものを三層房と云ひ、後罩房の無いのを二層房と云ふ

間取りは何れも奇數にするのが原則で三間房子であれば中央の部屋に入口があり、ここは土間になつてゐて、その

房子の朝

左右は居室です。それも觀音開きの板戸がついてゐて、襖や障子一枚あけると自由に出入できる日本の部屋割とは趣が違ひます。この居室の窓に面する半分は炕（溫突）を築き、炕の上には衣櫃（ツヅラ）があり、その上に夜具類を疊んでおく。半分の土間には戸口正面の壁際に机や椅子を据ゑ、それ相當の裝飾をします。五間房子の場合は第一室は炕の向うに机をおくか衣櫃をおくのです。中流家庭では門房か廂房の何れかに應接室があります。炊事場は廂房か耳房（正房の兩端につけた小部屋）にあることもあり、竈の作りは一般に頑丈なものです

次に中流以上の家では家堂と云つて祖先を祀る祭壇があり（寫眞の家堂は北京某文人宅の正房中央の室、突當りにある）又家によつて督財府と云ふ財神（福の神）を祀る祭壇があります

最後に便所はほんの形式的なもので殆どわれわれには不潔と云ふ他はない

以上ざつと中國家屋の見本的な造作について述べましたが、北京は都會としての性質上、敷地の制限を受けるのでどの家でも右のやうな正確な配置をとるとは限りません．

北京の市民生活

住居　四

この一聯の寫眞は北京南池子の某文人宅（中流家庭）にて撮影した

①厨櫃と時計・食器棚である。上の時計と鉢は飾を兼ねたもの。正房中央の部屋、戸口を入つてすぐ右側にあり、左側は對にして同じものを置く

②家堂・日本の佛壇に當るもの、祖先の靈を祀る。正房中央の部屋戸口の眞正面にあり。右の出入口は主人の居室へ、左は主婦の居室へ通ずる。堂前左右にある桶は食糧を入れる

③主婦の居室・正面の裝飾、左半分は炕になつてゐる、右方土間に衣櫃

④書齋の机上・眞正面に硯屛あり

⑤衣櫃・日本の簞笥に當る

一

四

三

二

五

北京の市民生活

服装 一

いまの支那服は旗袍といつて、約二十年前から清朝旗人の女の上衣を普遍化したものである。民國革命後にも衣の世界だけは清朝時代のものを、南方系中國人までが、よろこんで、踏襲したわけである

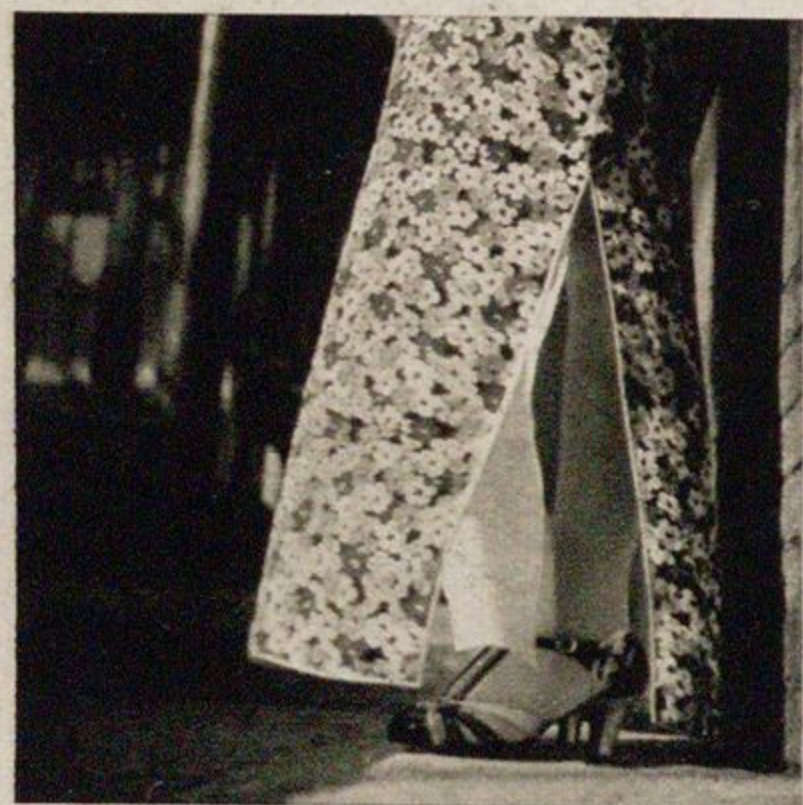
若い女性が流行に鈍感であり得ないのはどこの國でもおなじらしい。中國の流行の發源地は何といつても上海である。襟の高さが上海では二分低くなつた、とか、ホツクで洋裝のやうにとめるのが上海で流行してゐるとか呉服屋や仕立屋が煽動すれば、北京娘はその度に大動搖をして、去年の流行衣はもう今年は着られない場合が多い

此の婦人の服裝は都會地ではあまり見かけないが、田舍では一般的な夏姿である。

素朴な夏帽

此のヴエールは主として春の風の吹く季節にかぶる

ブローチ各種

履物各種

北京の一般的な夏の服装

馬褂兒、男子の禮服

小褂兒、單衣の下着、シヤツ代用、此の下に褲子（ズボン）をはく

大夾襖、袷の長衣、これが男女上衣の基本的なものである

多は大夾襖の裏に羊の毛皮を付けたものを用ひる

北京の市民生活

服裝 二

中國では、喪のある家でその家族が白い木綿を着る外、男子が公式の席に馬褂兒を着る以外に禮服も喪服も無い。おくやみにも、よろこびにも、散歩姿のままである。それで一寸も失禮にならないのである。此の點は、日本人が大いに、中國人の生活を學ばなければならない

でも、此の頃は男子が洋服を着るやうになつた。そのことを林語堂が嘆いていふ。「妻のある人ならばそれは妻の尻に敷かれてゐる男だ」と。「近頃の中國の一般婦人が背廣を着た人をあこがれる傾向があるので夫が妻の歡心を買はんがために背廣を着るのだ」さうだ。また、「未婚の青年が背廣を着るのは、西洋かぶれと、おしやれのためだ」と。さうして支那服を力一杯禮讃してゐる。恰も日本のゆかたのやうな着心地なのであらうか

子供の服裝といつても特別に形の異つたものはない。只大人のものを小さくしたのが子供の着物である

一、風帽をかぶつた少女、もちろん防寒防風用である――開封にて

二、小兒の肌着、これで夏を過すのである

三、最も一般的な北京の子供の冬の服裝がうかがはれる

四、老虎帽をかぶる少女と、毛糸のジヤケツを着た少女――北京にて

一

三

二

四

一

二

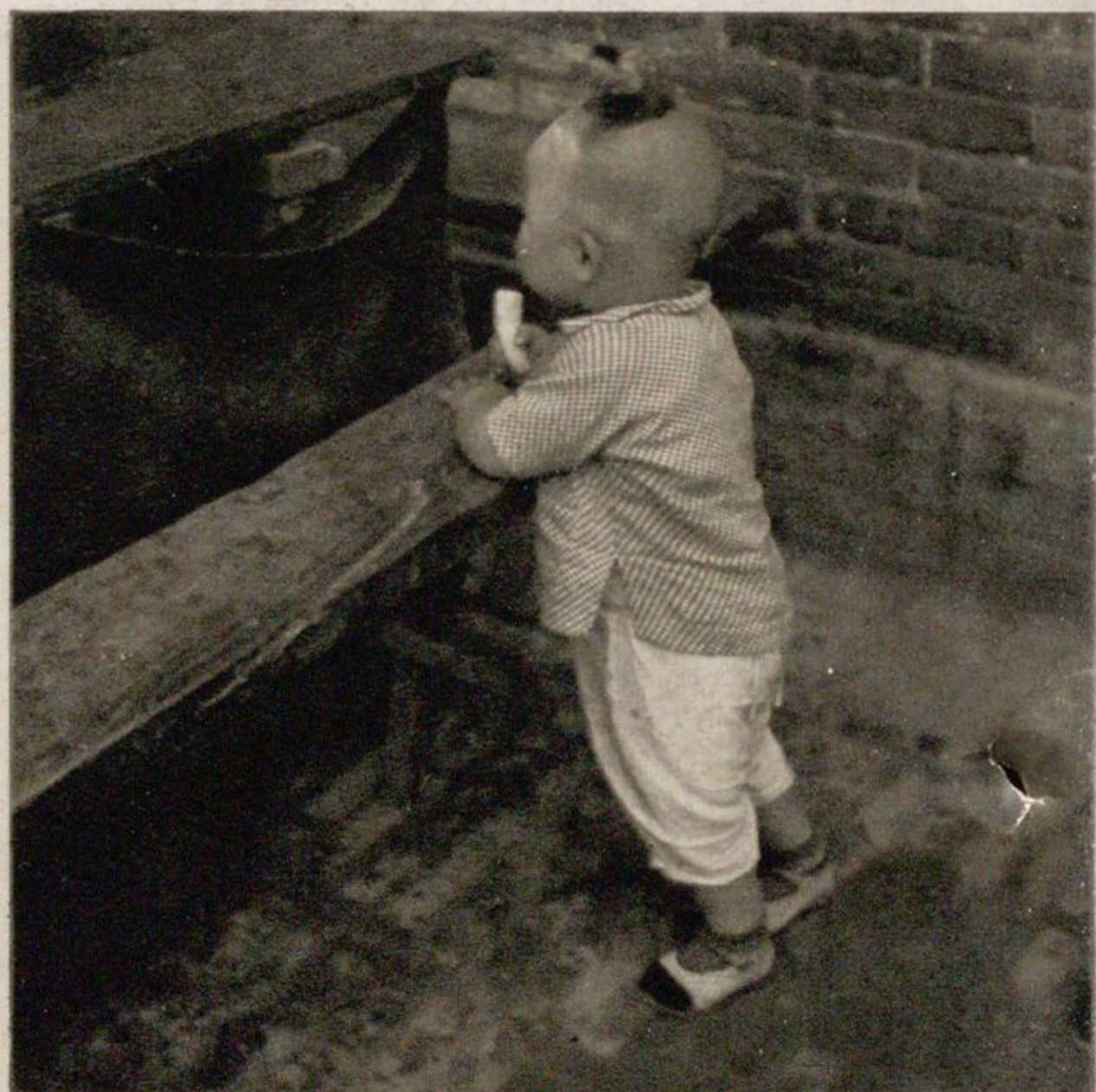
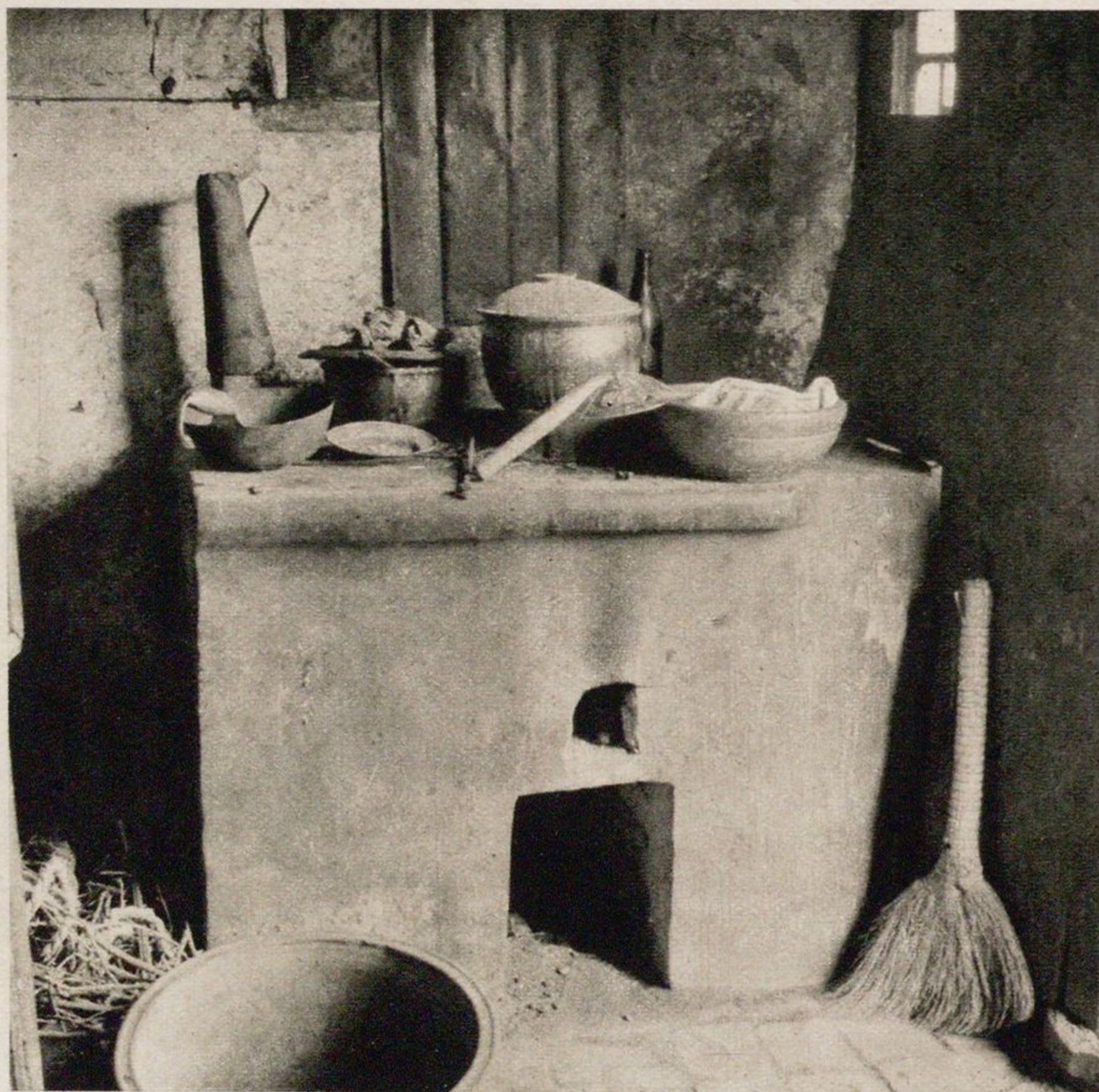
四

五

三

北京の市民生活

臺所用品 一

北支の大衆の住宅では、お勝手と云っても特別の一部屋がない方が多い。その上、至極簡單な臺所道具で料理をする。お砂糖抜きで、鹽と油と香料が、天下に名だたる味を生む單純な少ない道具で、簡素な調味で極上の料理が出來るのである

一、元沙鍋、土製のお釜、御飯を炊く
二、小鐵爐子、七輪の役をする。鐵の鑄物でありこれは比格的高級である。上の穴から鷄卵大の煤球兒（タドン）を入れて火をおこす
三、まな板と庖丁
四、燒水鐵壺、つまり鐵瓶である。山西產多し
五、籠屜、せいろ
六、甕、概ね北壁際にあり

六

北京の市民生活

臺所用品 二

一、炒菜鍋。普通のお鍋である、鑄型ものではなく、平たい鐵板をたたいて丸味をつけたもの、大小

二、銅把勺。赤銅のひしやく。これも右のお鍋同樣たたき丸めたもの、徑八寸程

三、漏勺。鐵製、油揚などをすくひあげるもの。すくひの徑三寸

四、銅水川子。お湯を早く沸かす器。高さ五寸位

五、鏟。炒餅などを鍋からすくひあげるもの

六、ざるの如きは爪籬と云ひ、麵類をすくふ。木製のものを馬勺といふ

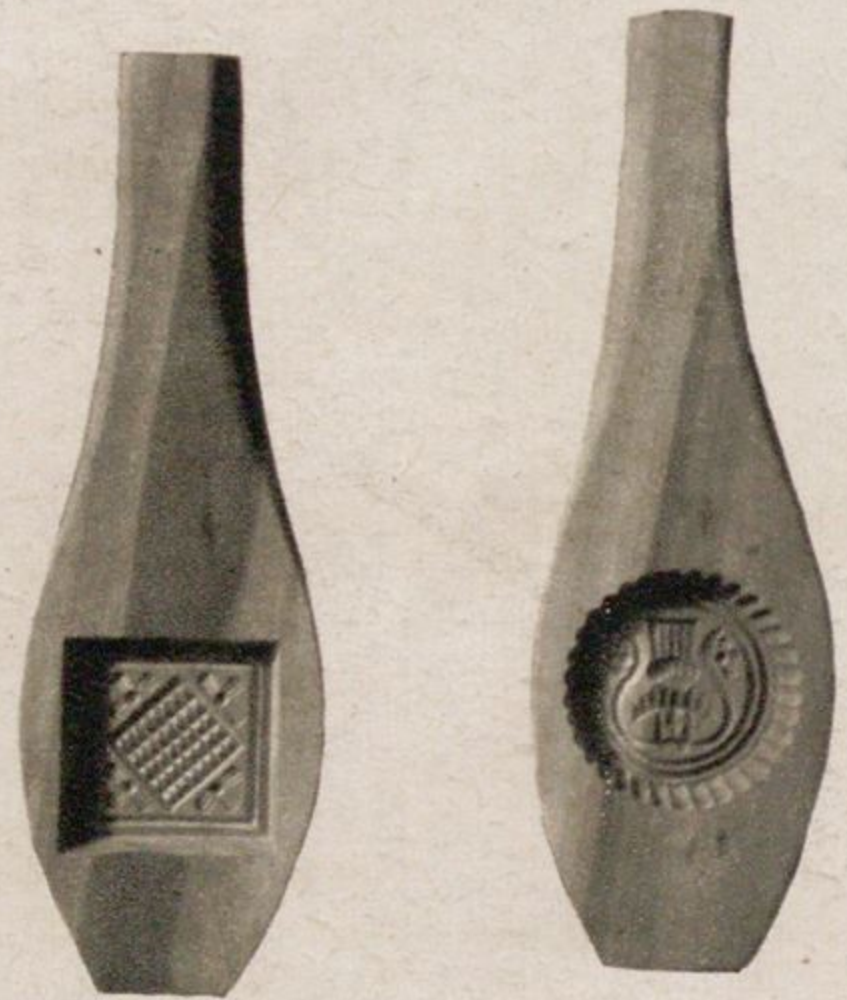
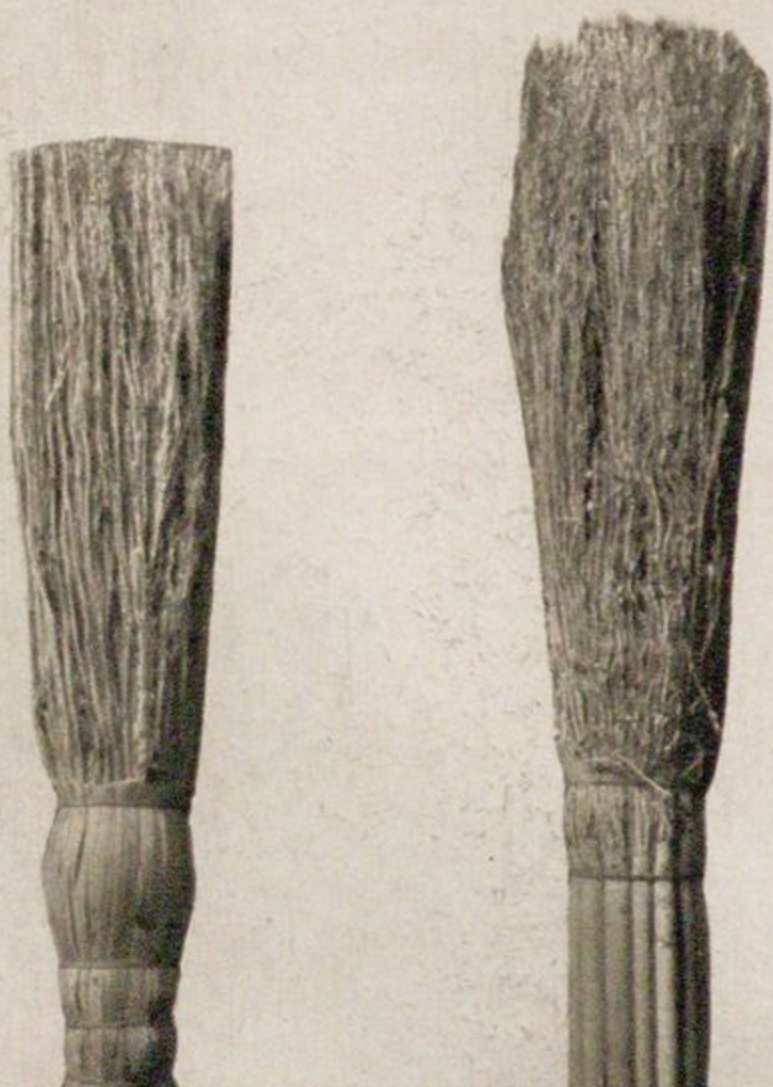
七、點心模子、菓子や饅頭の木型、日本にもある。大小種々

八、掛籠。ごみすてかご

九、籠屑炊具。たわし、五寸位

十、鍋炊具。主として炒りものをした鍋の掃除をするに用ふ。七寸位

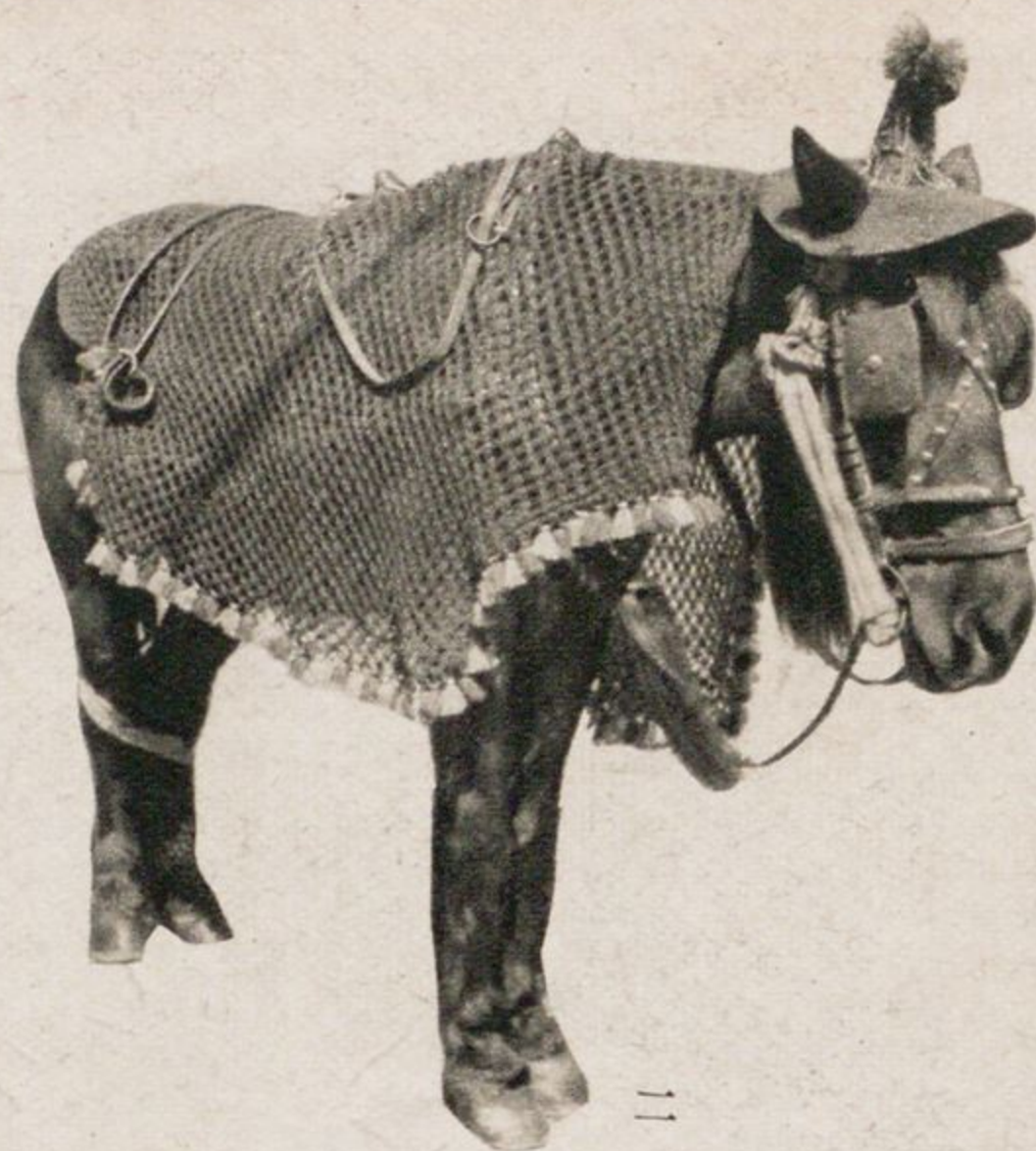
二

九

七

十

八

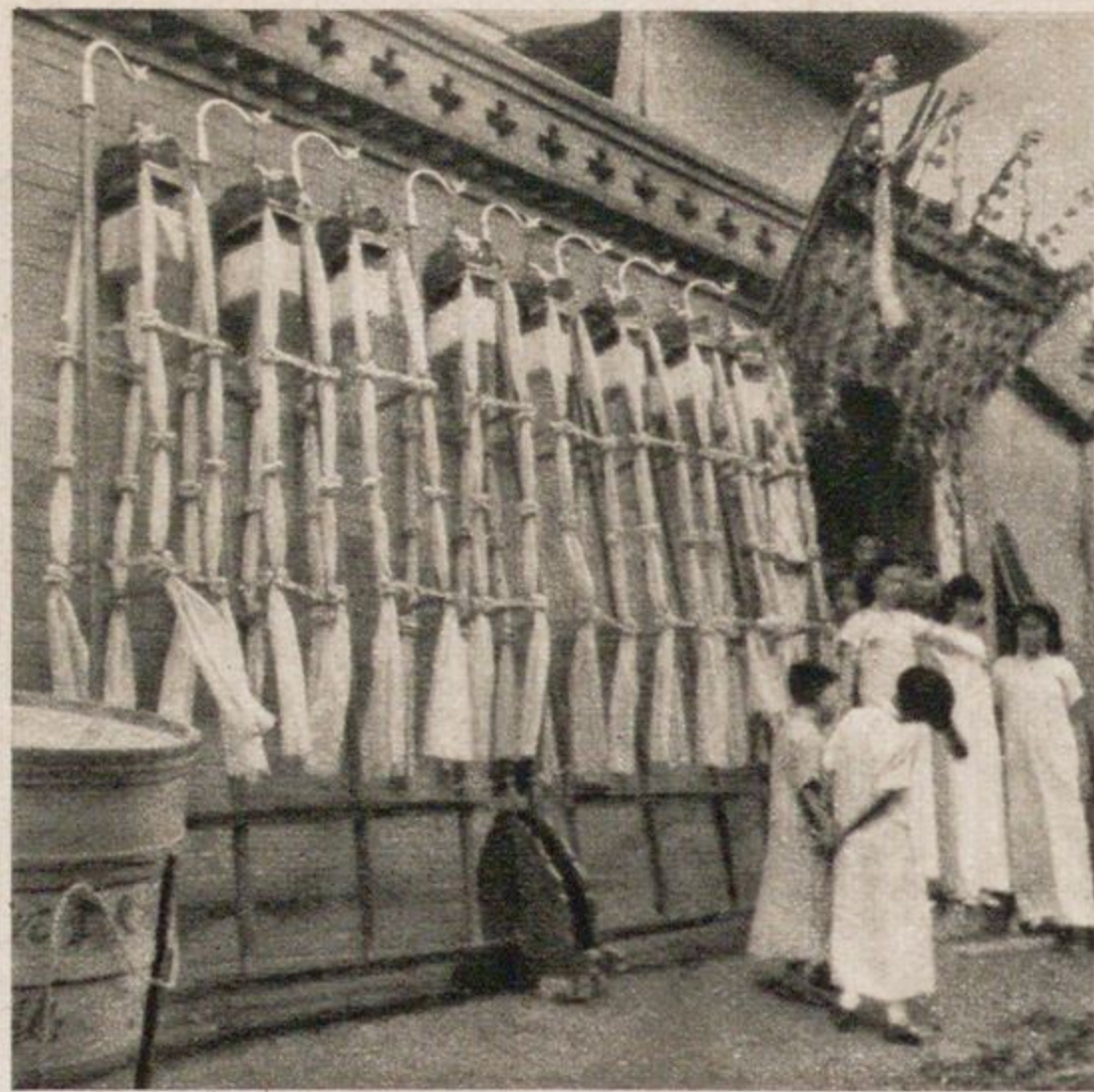
北京の市民生活

婚禮

一

二

中國の都會に住んでゐると、不思議な日がある。それは、街の辻の、或は胡

三

五

四

同の行く先々で結婚の行列に行き會ふからだ。この日こそ暦に示された婚禮に佳き日なのである。佳き日を撰んで式を擧げるのは、日本にかぎらず、中國と云へども人情に變りはないのであるが、緣起をかつぐことの好きな中國民衆の場合、それは一種の信仰のやうなものである

新式の樂隊や、或は古式床しい雅樂の先導で、都大路を練りゆく輿の行列は美しく、また樂しい風景である

「中國人の結婚は、妻をお金で買ふかのやうに傳へられてゐるが、それはたいへんな間違ひで、お金を受け取つた妻方からはそれ以上の足前をして嫁入りするのだ」と『中國人の生活風景』の著者柯政和氏は云つてゐる。もつとも、下層社會では妻をお金で買つてゐる場合もある

六

結婚の形式は西洋化した新式、從來の舊式、それから新舊折衷といろいろであるが、近頃知識階級では新式が多く將來益々普及するであらう。それは經費や形式が簡便だからである

此處に紹介するのは舊式の例である

七

一、衆親太々の禮裝、結婚式當日嫁を迎へに行く役で親友の奥さんに依頼する。これには二十歳以上六十歳以下夫婦健在といふ資格が必要である

二、輿を曳く馬、赤づくめのお目出度い色を多く使つてゐる

三、新郎、新婦、式場へ。式場では天地、祖先の神を拜し見禮の儀を行ふ、それから親戚、知友に對し、磕頭の禮をする。新郎の胸の丸いものは鏡である。

四、五、嫁の來る家には斯うして串灯（右）と亮轎子（左）が飾られる

六、結婚行列

七、喜棚筵宴といつて、婚禮の第一日、新妻の家の中庭で、掛け小屋（喜棚）を造つて、早朝から客を接待する

北京の市民生活

葬式

一

三

四

二

中國の都會では一日中街の至るところで葬式にぶつかることがある。これまた婚儀の場合と同樣、死者を送るにかなつた日だからである

喪に關しては嚴肅で、父母の亡くなつた場合は全財産を費消して葬儀を行ふ者もあり、一般に三年の喪に服するのである。葬儀は佛式が多い

一、小男兒、と云つて子供を肅つて故人への供物を持たせる
二、方相、行列の先頭で、惡魔を拂ふ紙人形
三、棺
四、前方が觀音、後方が開路鬼
五、燒樓庫、と云つて、葬儀に使用した一切の紙製の用品を燒く、遺族は同時に磕頭の禮を行ひ、泣くのである
六、女の喪主は轎に乘り、男の喪主は歩行する
七、葬列、一切白を使ふから葬式を白事とも云ふ

六

五

七

墓

祖先の埋葬は特に重大である。風水、位置、方角等が實にやかましく考慮せられ、その選定の如何によつて、子々孫々の繁榮するか否かが定まるのだといふ。若し理想的な場處と條件が得られない場合は、とりあへず葬式だけ先に濟ませておいて、靈柩は寺に預けるか、または野外に假埋葬して、後から本式に埋葬するのである

一、二、連雲港外西連島にある倭寇の墓
三、南同蒲線介休にみる回教徒の墓
四、南同蒲線金井村
五、北京、漢民族中流の先祖代々の墓
六、北京、中流の墓
七、北同蒲線、平原鎭にて

三

一

四

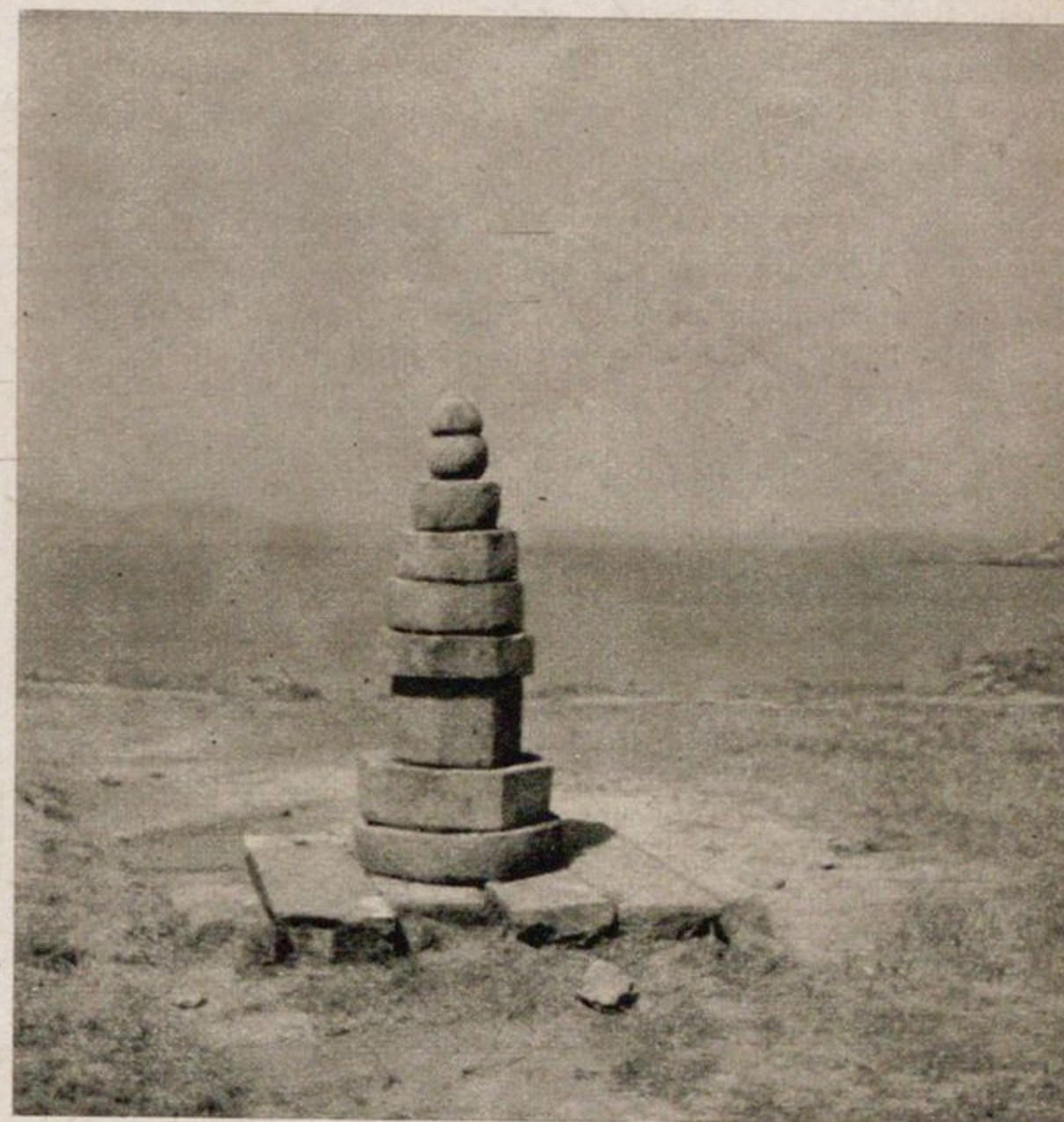
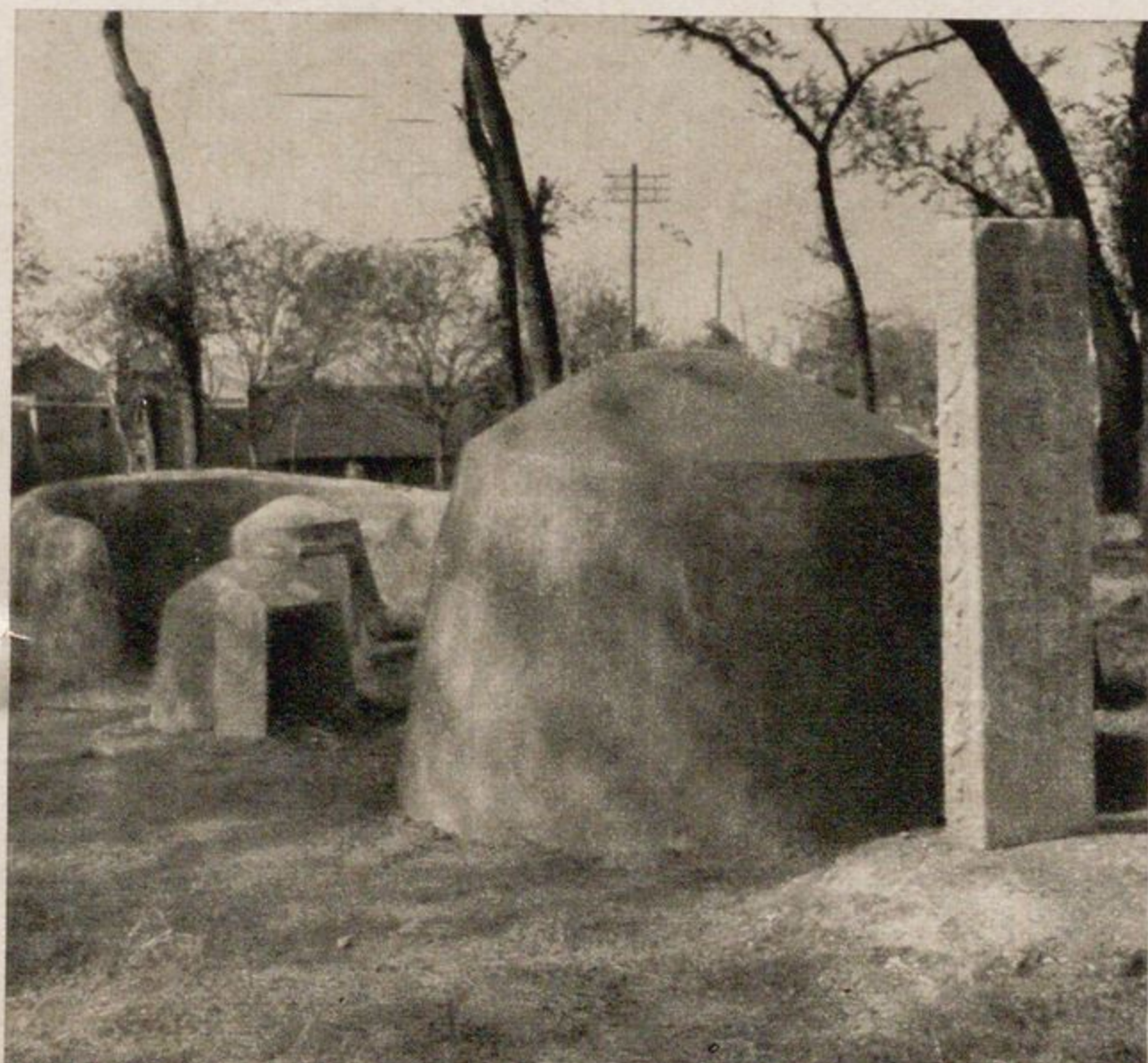
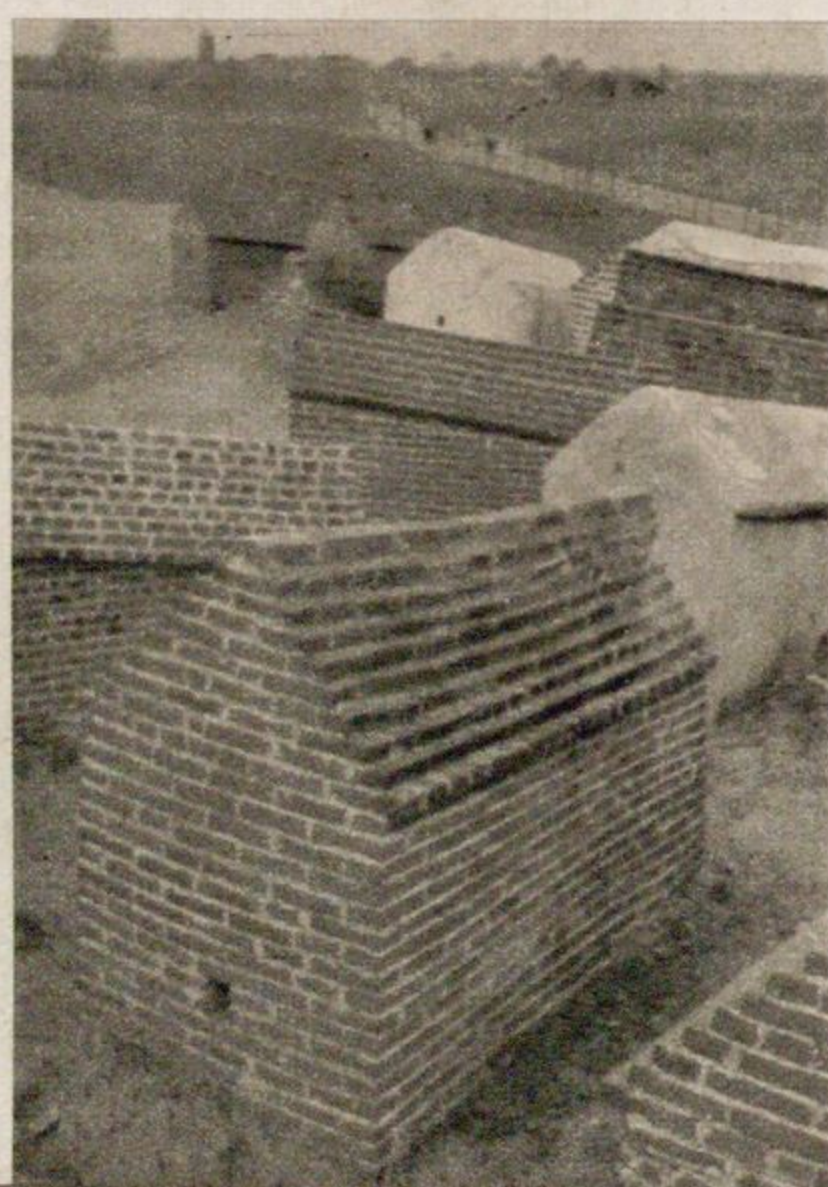
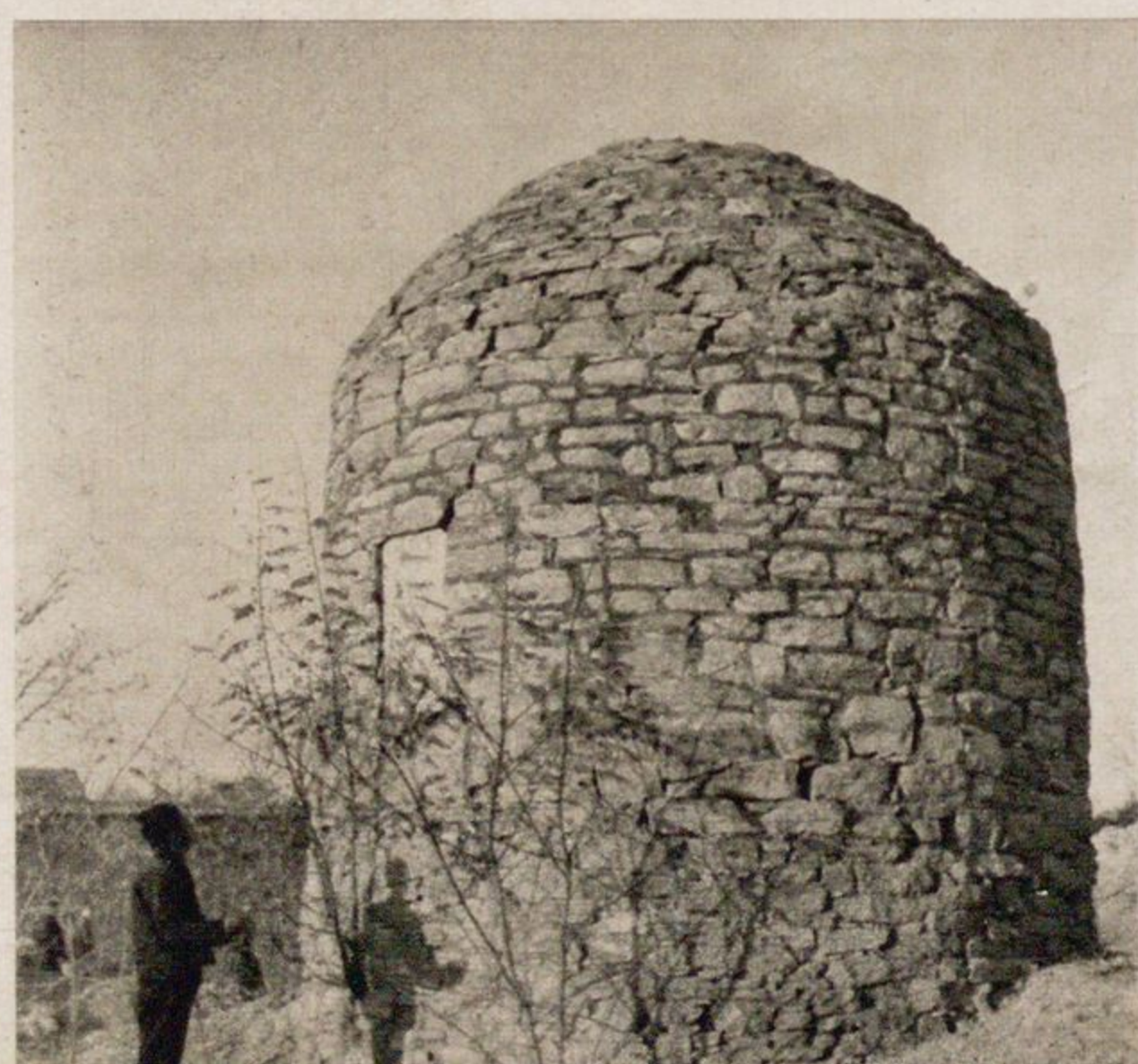
二

五

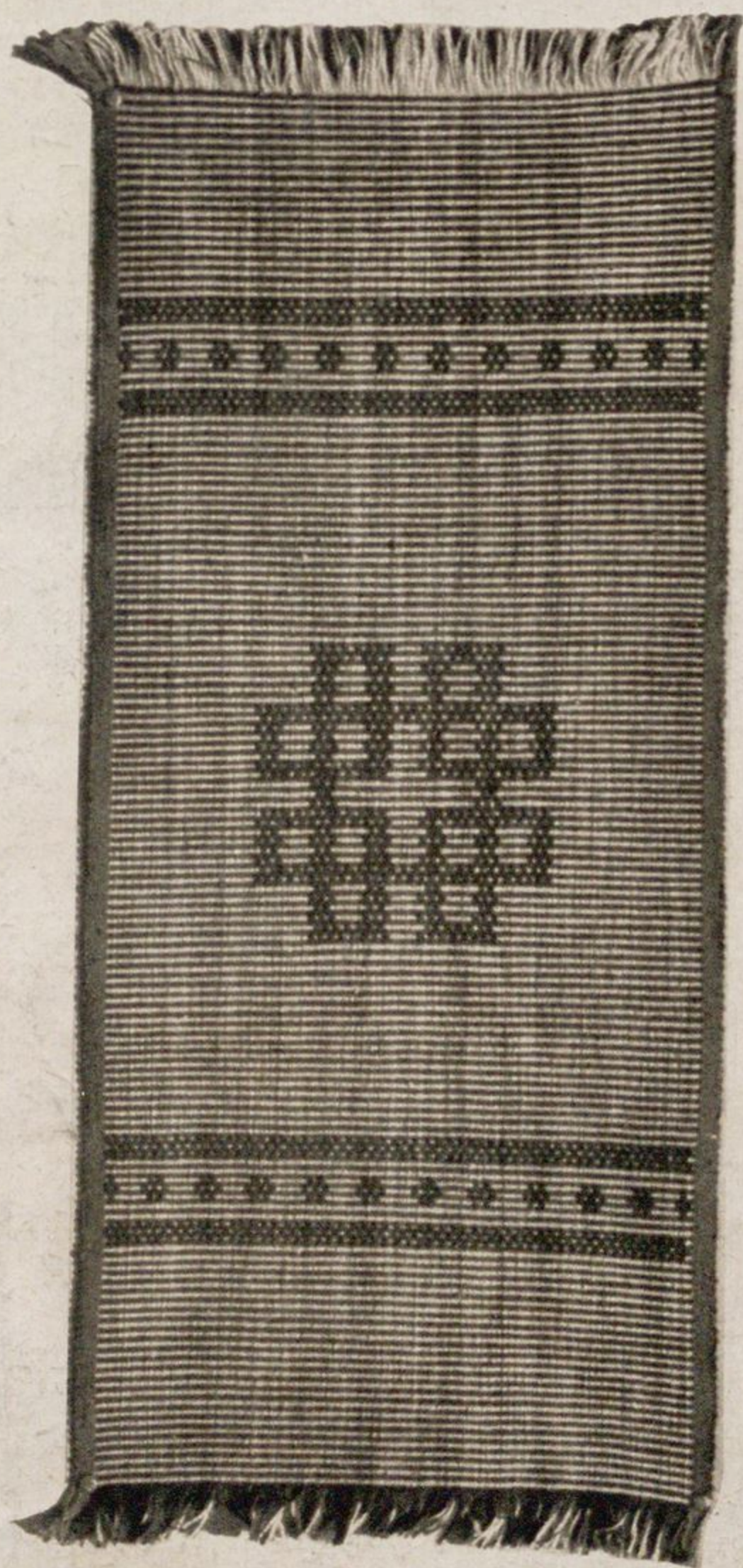
九

六

十

七

八、徐州、子供の共同墓地、後方に長方形の穴があり、死兒をそこより投入する、中に白骨多數あり
九、五臺山、臺懷鎭、喇嘛教徒の墓
十、五臺山、碧山寺、喇嘛住僧の墓
十一、津浦線、兗州城外の共同墓地

十一

八

北支の新らしい工藝

厚生産業とは、民衆の生活を物心兩面とも、手厚くする産業である
心の糧となり精神力を强め、くらしを裕にする産業である
新民會厚生産業指導所では、農村や街の大衆の住家に今も殘る純中國の健やかな品物が、もう一度、息を吹き返してゐる
中國の資材と傳統に、日本の知性と感性の取り組んだ新しい東亞の文化の姿がここでは眺められる

四

一、井陘窯製の茶碗類

二、石門の線毯布（敷布に、のれんに袋類に用途は多い）

三、石門の木綿の刺繡

四、順德製土布の服地、堅實な生地、清楚な柄

一

四

二

一、窯たき
二、ろくろ
三、干し場
四、繪つけ
五、土練り

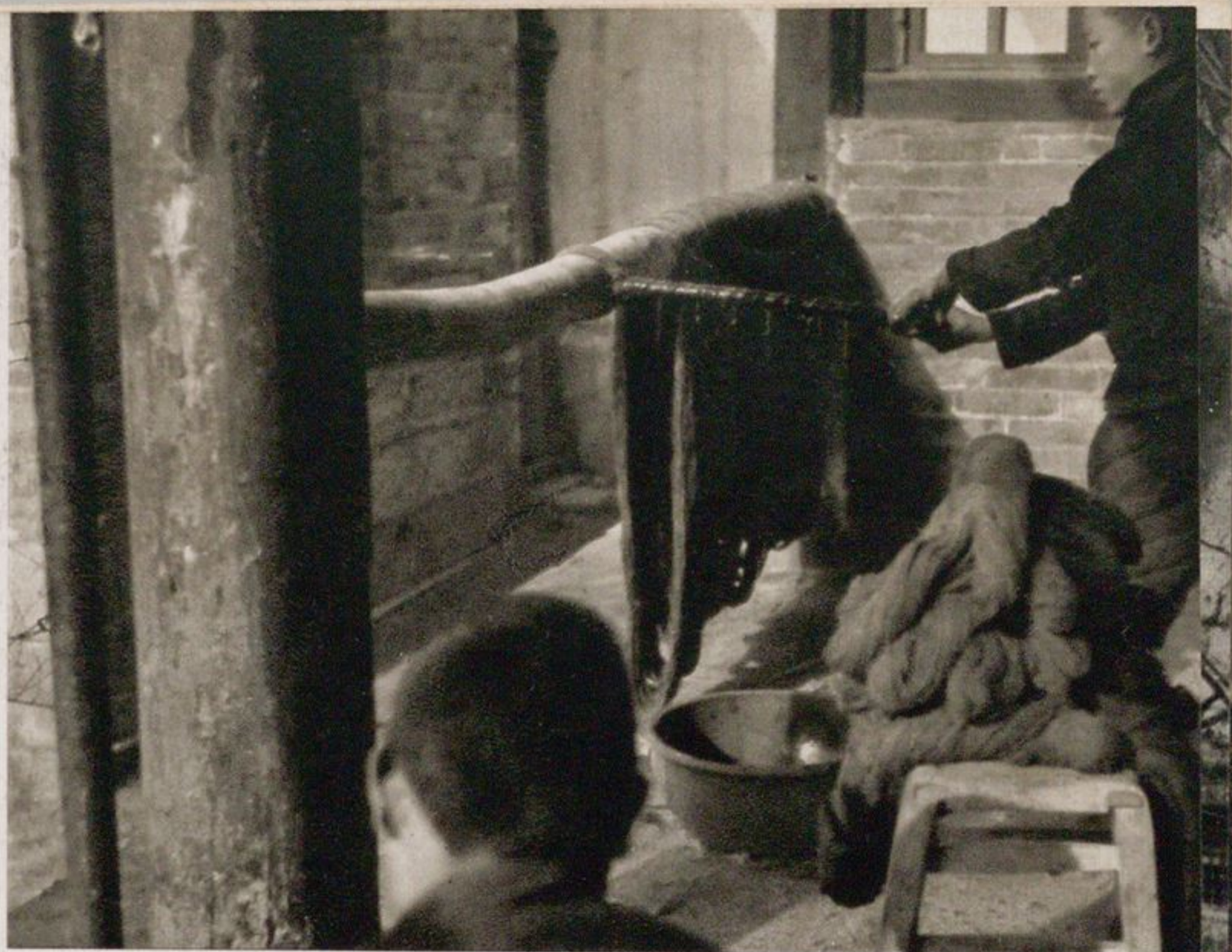
井陘の民窯

井陘の窯場は縣城から二十支里離れた南横口村にある。綺麗な河が丘陵を扼した景勝の地で民家と窯は丘の斜面に穴を掘り、煉瓦や石で構へを重ね、豐かな陽光に映えて中世紀の話を祕めた古城に想をさそふ。窯は磁州より分れて以來二百年の歴史を數々の民器で飾る。更に明日の生活の糧となるべき器を種々試み華北の民窯の先鞭をつけた村を擧げて井陘は明朗に働いてゐる

織物と刺繡

一

二

三

順德では主として土布（手織木綿）の指導をしてゐる。多勢の少年達は仕事や生活を通じて訓練される。作るものの多くは新民服地、夏物、多物樣々ある他に前の頁にあるやうな婦人服等も作つてゐる。これからの生活は質素ななかにもうるほひを失つてはいけない

六

四

七

五

石門の刺繍は栗村を中心に指導してゐる。田舍で見る刺繍は多く木綿糸である。ここでも近くの村々から出てくる土布を加工して數々の美しい机掛やブックカバーや袋物やカーテン衣服地帶等を作つてゐる。昔風に花樣兒と呼ぶ型紙をはりつけて縫ふために、誰にでもできるし、良い型を選べば間違ひなく美しいものが出來る。この仕事をはじめてから目に見えて村の人氣がよくなつた。農村には歐米に犯されない中國本來の生活文化がまだまだ豐にある

一、のりつけ、よいのり加減はよい布を作る

二、織機

三、織上げた布を水で洗ふ

四、田舍の娘たちの靴に見る可憐な木綿の刺繍、これが石門の刺繍のもとだ

五、婦女授産所

六、家に持ち歸り縫ふ者もある

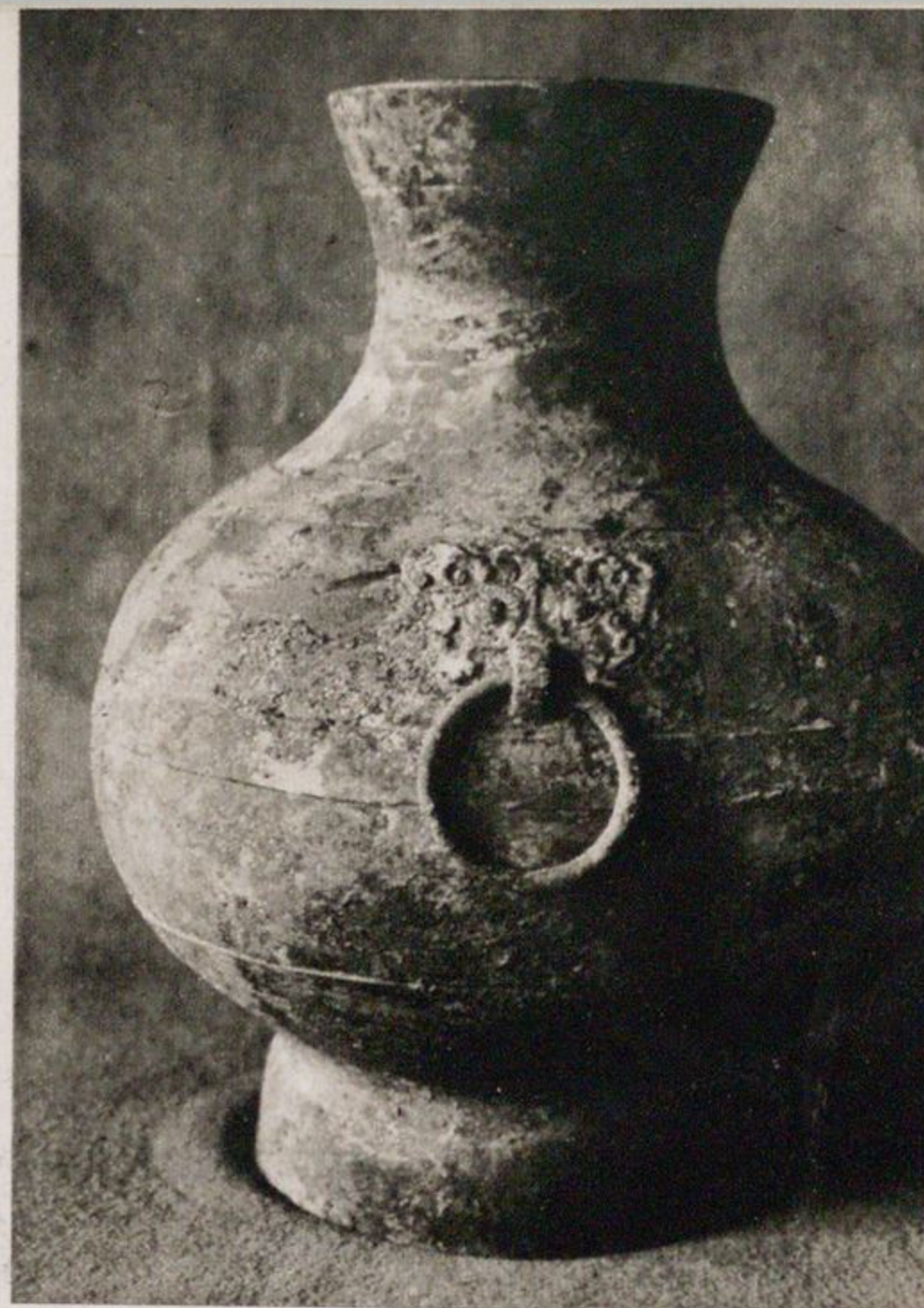
七、花樣兒をはりつけて縫ふ

漢代古墳の發掘

（北沙城考古記）

三

二

四

發掘に關する記事は本號よみもの頁にあり。右の壺類はその出土品

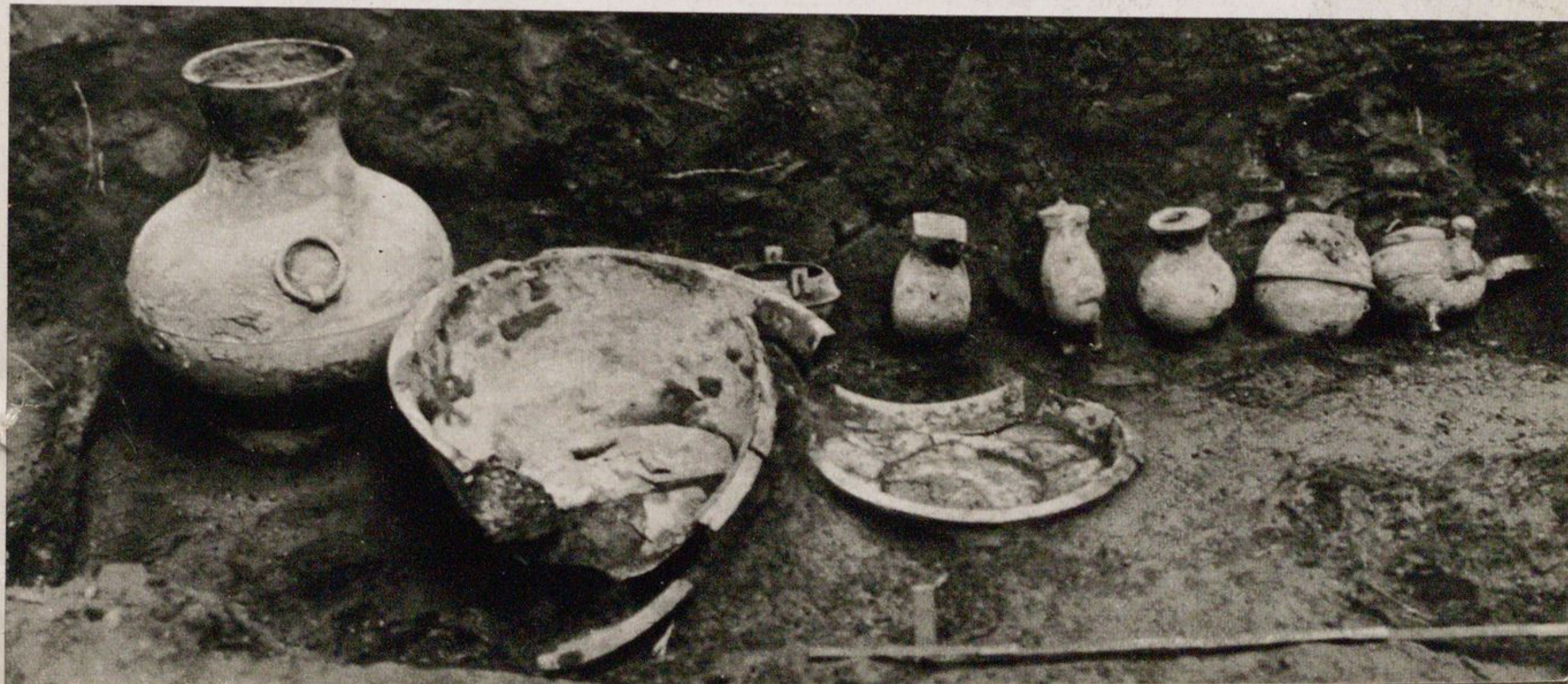
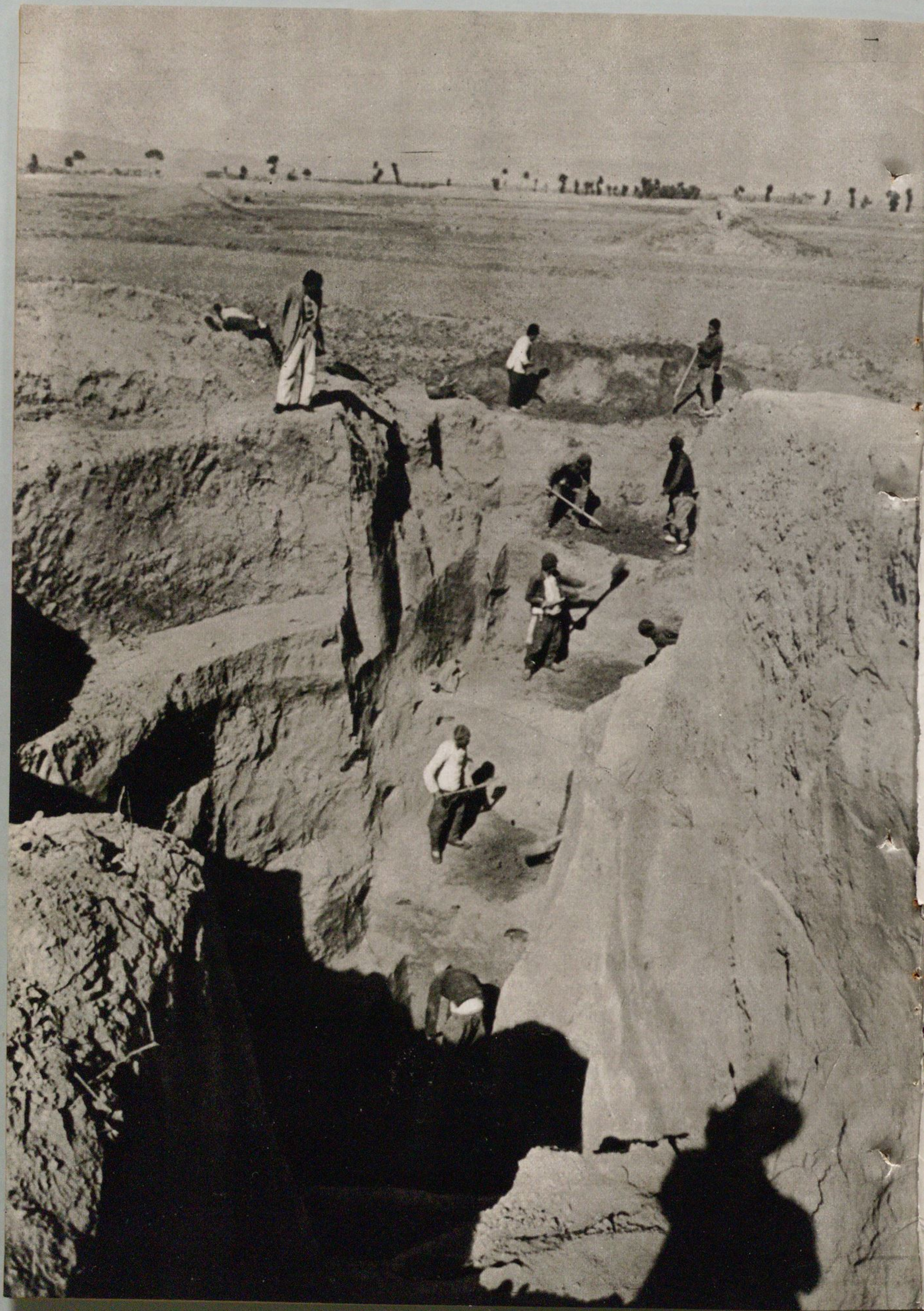
一、六號墳發掘。高粱畑の中に、累々として、幾千年もの古塚が眠つてゐる

二、この壺は酒の入れもの、把手の座は獸の顔で、左右一對の把手がある

三、博山爐、上は山に象り、下は鳥と龜。蓋を香を焚くとその香煙は山のすき間から立ち昇るのである

四、鼎、これは羊とか猪の犧牲を烹るものだが、これは小さい。埋めたときは蓋がとつてあつて、勺がそへてあつた。そして上から布片がかぶせてあつたのである

五、墳底の南壁に沿つたところ、左から、酒壺、洗、槃、鼎、鈁、扁壺、壺、甑と釜、錐斗

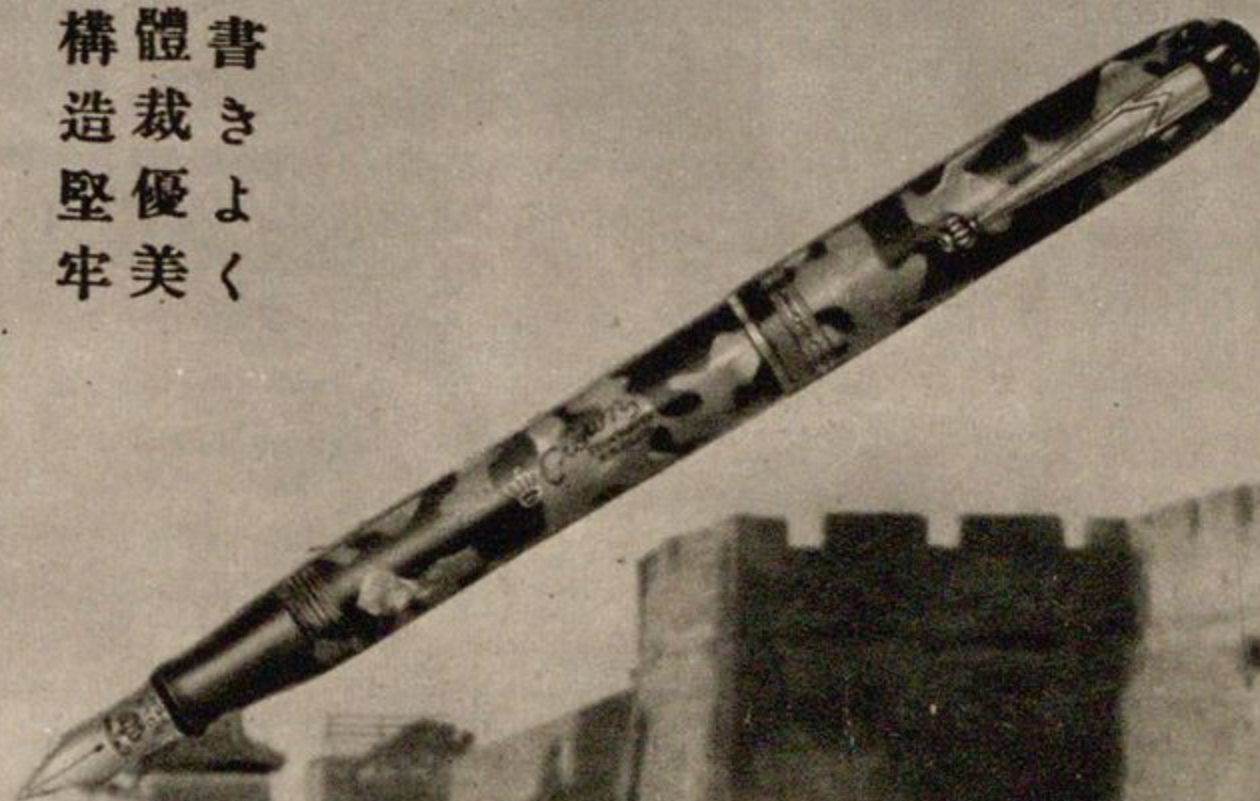
五

新生國策
イリヂュウム
白金ペン付

クラウン万年筆

書きよく
體裁優美
構造堅牢

流線型

―欒縣・縣城―

大阪・東京・小倉　株式會社　澤井商店

支那の家庭生活

橋本泰治郎

起在頭裡　朝は一番先に起き
睡在後頭　夜は誰よりも後で寝て
做在頭裡　御飯は自分にこさへても
吃在後頭　あとで頂戴致します

これは支那の花嫁講座の第一課である。うちでは今迄朝寢をしてゐても、お嫁に行つたら、朝は必ず良人より一時間前か、少くとも三十分は早く起きて、手早く身づくろひをし、朝の支度にとりかかる。

旦那樣がお目醒めになると、日本の主婦はお會ひしたところで、エプロンをかけたまま、或は御飯を頂く前に、改めて三つ指をつき、お早う御座います！　といつて朗らかに朝の挨拶をするけれども、支那の主婦は心には良人に對し溢れるやうな敬愛の念があつても、それをかたちに現はさず、さも女王が王冠を冠つて勝ち誇つたやうに、挨拶もしなければ會釋もしない。

しかし、目上に對しては、襟を正して、お早う御座います！　と朝の挨拶をする。嚴格な家庭では、大人は父母に對して『爸爸！　您起來了！』『媽！您起來了！』子供は兩親に對して『爸爸！』『媽！』といつて恭しくお辭儀をする。

朝の食事を頂く前に、日本の家庭では一家揃つて、天照皇大神宮をお祀りした神棚や、先祖をお祀りした佛壇に御燈明を上げ、時局柄先づ皇軍の武運長久を祈り、そして今日も一日健康でよき働きをと敬虔な祈りを捧げるが、支那の家庭では、かうしたお祈りをどうしてゐるか？

支那の家庭では、主婦が家堂佛（現在これをお祀りしてゐる家庭は少い）や、灶王に線香を上げて、一家の繁榮と無病息災を祈るだけで、他の人は別にお祈りと云ふことをしない。家堂佛は關聖帝君、菩薩、文武財神をお祀りした小さい佛壇で、先祖の位牌をお祀りした佛壇ではない。關聖帝君、菩薩及び文武財神は無病息災幸福を齎らす神であつて、何れも紙の御肖畫である。

灶王は灶の側に在つて、一家族の行爲を嚴重に監視される神樣で、これも紙の御肖畫である。

男不拜月、女不祭灶——灶を祭るのは男の役で女ではない、といはれてゐるが、これは陰曆十二月二十五日の『祭灶』の行事を指すのであつて、日頃のお祀りは、やはり、主婦の役目となつてゐる。

支那の家庭には、日本のやうな先祖の位牌をお祀りした佛壇はないが、上流の家庭には『祠堂』といふ先祖の位牌をお祀りした獨立家屋がある。

祠堂の中には細長い机があつて、その上に位牌がお祀りしてある。普通の家庭には祠堂がないので、位牌は木箱に入れて仕舞つておく。先祖の位牌は『神主』（×××之神主と書いた位牌であり、主の字の、上の點は朱で、下の王は黑で現はす）と云つて、漢人の家庭にはあるが、滿洲旗人の家庭にはない。滿洲旗人の祠堂に祀つてある謂ゆる位牌は『×××之位』といつて、神主とはいはない。

漢滿を問はず、中流以上の家庭にはこの他、遺像（先祖の肖像畫、又は寫眞）といふものがあるが、これも木箱

内容

第四卷　第六號

に入れて仕舞つておく。そしてこの神主や遺像に御燈明を上げて禮拜し、先祖の恩澤に感謝するのは、普通年に一回で陰曆十二月の末日だけである。嚴格な家庭でさへも、この日の外に毎月陰曆の一日と十五日、五月と八月の節句、故人の命日と誕生日に禮拜をするだけで、日頃は朝夕の禮拜をしない。

朝夕の禮拜をしないところに、清い光がささう筈はない。これは、支那の民族にとつて、一つの大きな不幸である。よし又、先祖に對して禮拜をしても、それは飽くまでも一家本位であつて、日本のやうに家系と國家とが同根の生命の上に立つところの渾然一體の信仰ではない。

家系と國家とは、個々の存在であつて、有機的なものではなく、一家の幸福は必ずしも一國の幸福と一致しないのである。支那では一家の幸福のためには他を顧みないことが屢々ある。善につけ惡につけ、支那人の生活の基本的な原理は、實に此の點に存するのであらう。

朝の食事は、中流以上の家庭では、點心（ウドンや饅頭や燒餅などの類）といふものを食べるが、下層階級では朝はお茶をのむだけで何も食べない。

食事の回數は、中流以上では、此の點心を入れて一日三回、下層階級では、筋肉勞働者を除いて一日二食である。

主食物は、南方人は米、北方人は小麥、玉蜀黍、粟、高粱などで、嗜好としては南方人は米、北方人は麵類である。北支や滿洲國の下層階級の人達の主食物は、玉蜀黍、粟、高粱などでつくつたもの、副食物は漬物が主で、他に出盛りの安い野菜を食べる。一年を通じて彼等が麵類や肉類を食べることは正月・端午の節句、八月の中秋節以外にはないといつてもよい位である。しかし、人力車夫になると、勞働の關係上よほど贅澤の部に入つて、麵類も食べれば、たまには炒菜（油でいためた料理）も食べる。

中流どころになると、主食物は麵類が多く（北支、滿洲國では）三度に一度は米、時には窩頭（玉蜀黍の蒸し團子）も食べ、副食物には便飯館（一膳飯屋）にあるやうな色々な料理を食べる。上流になると、これはまた吾々の想像以上で、贅澤の限りを盡し、燕の巣や鮫の鰭はまだしも、銀耳・猿の腦味噌、熊の掌などといふやうな、一食數十圓もするやうな御馳走をペロリと平げることさへある。

良人がお出ましになる時、日本の主婦は『いつてらつしやいまし』といつて、慇懃に送り出すが、支那の主婦は默つてゐてお辭儀もしなければ見送りもしない。第一、支那語には『いつてらつしやいまし』といふやうな情味豐かな言葉が無い。

勤め人で、明らかに夕方は歸つて來ることの判つてゐる者に對して『慾走了』といふのは間違ひであるし、また事實、習慣上言はない。だが、ホヤホヤの花嫁さんは、良人の歸りが待ち遠しいので『あなた、早くお歸りなさいネ』といふやうなことはある。

更に、支那のサラリーマンは辨當を持つて行かない。支那語にはまた、この辨當といふ言葉もない。

日本語の『辨當』も、支那人は『飯盒子』と譯してゐるが、飯盒子は『御飯入れ』と云ふ意味になるので、その中に御飯やお菜が這入つてゐるといふ觀念がない。またピクニックに行く時の辨當を『點心』軍隊の辨當のことを『乾粮』といつてゐるが、これも日本語の辨當とは意味が違ふ。從つて晝食は役所の附近の食堂でするのである。

良人が勤めに出かけると、妻は掃除や針仕事や、洗濯やそれから子供の世話をするが、支那のインテリ女性の中には、毛絲の編物は出來ても、あの簡單な支那服さへ縫へない人が多い。

また出來ても晴着は普通、仕立屋に出す。そのため、支那の街には『成衣舖』（仕立屋）が如何に多いことか。しかし、下層階級、殊に農村の女性は一家の者の着る衣類を一手に全部引き受けて、何から何まで自ら縫ひ、家族の者の穿く靴までもつくるのである。

洗濯に就ては面白い不文律がある。男の着物を洗ふ洗濯盥に、女の沓下、ズボン、ズロースを入れることは堅く禁じられてゐるが、その反對に、女の着物を洗ふ洗濯盥に男の沓下やズボンなど入れることは、一向差支へないのである。これは男性が知らぬうちに、女性同士が勝手に決めた不文律の洗濯法律である。

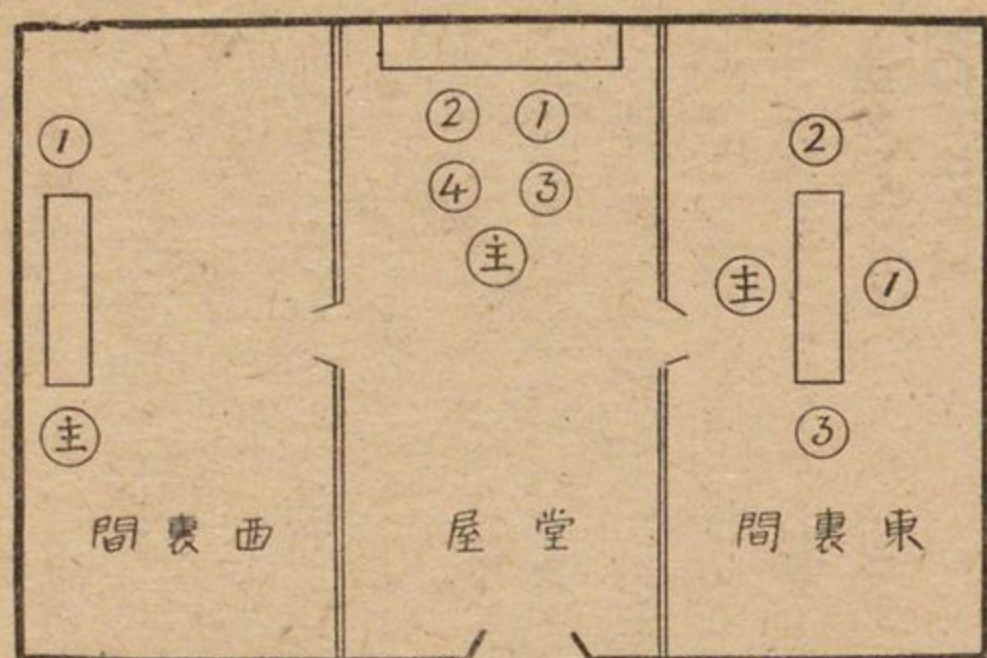
女中として働く者は、このことをよく心得てゐるので、傭はれると先づ第一に、どれが殿方用で、どれが御婦人用の洗濯盥であるかを訊く。

良人の留守中に、良人を訪ねて來た客があつた時には、妻は召使に良人の不在なることを告げさせて客を追ひ返す。また妻は良人がゐても、餘程親しい間柄、或は特に敬意を表した場合でない限り、奧にひき込んだまま絶對に姿を現はさない。

支那の主婦は、日本の主婦のやうに一緒に客間に出て心からなるもてなし

といふことをしない。

主人は、召使が居なければ詮方なく自ら茶を入れ、自ら菓子を運んで客をもてなすのである。そして支那では、日頃起居してゐる部屋へは、餘程親密な間柄でない限り、一切客を通さないのである。

客を上座にすすめることは、何處も同じであるが、支那の座席の順序は入口に向つて、部屋の一番奥に當るところの中央が上座、その左が二位、右が三位、入口に一番近いところが下座で主人の席である。従つて二人の場合には、左が上位で、右が下座となる。

東裏間　堂屋　西裏間

（圖に示す東裏間の場合の第二席は、建物全體から見て、北側が奥に當るので、そこが第二席となる。）

支那人は主人から茶をつがれると、中腰になつて、手に茶碗をうけ、『謝謝』とか『不敢當』（恐れ入ります）と云つて愛嬌を振りまく。支那ではこの素振りが誠に好ましい謙譲な禮儀とされてゐる。

急須の口は客の方へ向けない。急須の口を客の方へ向けると『沖運氣』といつて、客の幸運を茶の力で押し流すことになるから、いけないと云ふ。

そして彼等は、午前中の來客に對しては、サイダーや西瓜や梨などのやうな冷いものをすすめない。さうしたものをすすめると客に對してからかふことになる。此處には特にその理由を差し控へるが……。

また、一個の梨は二人で食べない。一つの梨を二人で食べると、兩分梨―兩分離―となつて、二人が離れ離れになつて、再び會ふことが出來なくなるからいけないと云ふのである。

支那では、客に外套を着せるのは、召使の職責となつてゐるが、女の客はボーイから外套を着せて貰ふのを喜ばない。召使がゐない場合には、男の客には必ず主人か息子が着せてやり、女の客には必ず主婦が着せてやる。しかし、夫婦の間では、主婦は良人に着せてやるが、良人は主婦に着せてやらない。尤も歐化した男性は、これは別で彼等は手を合せて女性に外套を着せてやらうとする。

旦那様がお歸りになると、妻は起ち上つて『您回來了（お歸り遊ばせ）』と云つて挨拶をし、時には『お暑う御座いましたでせう』とか『お寒う御座いましたでせう』といつて優しい犒らひの言葉をかけることもある。

支那の家庭には風呂の設備がない。風呂は一週間に一二回、或は一箇月に何度といふやうに、風呂屋へ行く。女は普通、寢る前に盥に湯をくんで行水をする。

良人の歸りが如何に遲くならうと、妻は床に就かずに待つてゐることは日本と變りはないが、良人が祕密の遊びをして歸つた場合、支那の女性は日本の女性のやうに、言外に意を含ませて間接法を以て夫の反省を促す樣な手を用ひず、角を生やして直接法で詰め寄る。それが若し二三回も續かうものなら早速、良人の押へのきく長上か友人に意見して貰ふ。

日本なら、そんな我慢のない女は早速、離縁沙汰すら持ち上りかねないのに、支那では、それが圓滿に治るのであるから不可思議である。

（筆者は新民會部員）

北京の歴史的一瞥

小野勝年

人間の一生に進歩や衰退があるやうに、それが寄り集つて出來た都市にもある。從つて北京に於ても、かかる消長のためしをまぬがれ得ない。

しかし、長い歴史の割合にこの都會は大體常に發展の途を辿つたと許し得る。勿論、王朝鼎革の際などは隨分悲慘な目に遇はないと言ふ譯ではなかつたが、かかる悲慘をもよく克服して、常に復興して行くだけの力は持つてゐたのである。

遠い昔のことは、固よりそれがどの程度迄信用出來るのかわからない。今を去る二千五百年許り前、ここに薊丘と呼ばれる都會があつて、山東省の曲阜や臨淄などと相並ぶだけの殷盛を極めてゐたと言ふから可成りなものだつたであらう。それは北魏の酈道元と言ふ有名な地理學者の作つた「水經注」に記されてゐる言葉であるが、この書には更に言葉をついで、その薊丘は今の薊城の西北隅に當ると述べてゐる。してみると、北魏時代の薊城は一層大きな都城であつたに違ひなからう。

さて薊城は、後になると幽州と呼ばれる。實は幽州とは相當廣範圍な行政區域を意味するが、普通の慣はしだと役所の所在地のみを指してゐる。

ここで言ふ幽州は、即ち後者の意味に於てである。この他、晉から唐にかけて燕・燕郡・涿郡・范陽郡等の名稱も行はれてゐるが、國治郡治の所在地は、何れもこの幽州の城内にあつたものである。そしてその間、五胡十六國時代には北族出身の慕容儁なるものが前燕といふ國を建てて都とし、唐の中葉に於ては地方軍閥の大領袖たる西域人安祿山・史思明等がここを根據として、相次いで反旗をひるがへしたものである。

今を去ること丁度一千年、同樣に非漢族たる契丹が遼を建てて國號とし、北京の地に都を奠めて、これを南京とか燕京とか稱した。このことは、今更說明する程のこともない著明な事實であるが、その都城は何もない黄土の上に新らしく建設したものではないのであつて、上述したやうに昔からあつた幽州城そのものを利用した。

遼は萬里の長城を越えて支那本土に侵入したものの、その政治的勢力は燕雲十六州と言つて、河北省の北部から蒙疆地區一帶にとどまつてしまつた。それに對し、これに代つた女眞の金は宋を南にしりぞけて、華北全體を支配した。そして矢張り前代同樣、北京の地に都して中都と稱したのである。

思ふに、日本と舊くから交通した渤海國を初め、この遼も金も、皆國都を五個處定めて領域を統治したのであつた。それ故、唯、都だと言つても、首都を除いては常に君主が居られるわけではなかつた。

遼の燕京の場合も、實は陪都であつたのである。然るに金の海陵王の時になると、愈〻此處が事實上の首都となつた。

海陵王は荒淫を以て名高く、而も即位と死際が惡いので、後世惡ざまに評され、大分損をしてゐるが、滿洲から華北に亙る廣大な領土に君臨するだけの貫祿は、矢張り持つてゐたと思はれる。

而も一面には、支那統一の野心に燃え、新たに中京を首都と奠めるや、直ちに城郭を擴張し、内容の充實にも努めたものであつた。

即ち、彼は遼の故都に依るや、開封にあつた北宋の宮殿の制度に倣つて、壯麗なる宮城を營ましめ、それと共に故城の東邊と南邊とを擴張した。

これに關しては、清朝の史學者趙翼が「廿二史劄記」の中に考證してゐるところである、更に又驚く可きは、これを内城とし、その外邊に七十五支里と傳へられた外城をも築いてゐる。

以上述べて來たところで窺はれるやうに、薊丘以來の都市は實に金の内城の中に漸次含まれつつ發展して行つたものである。從つて金以前の城郭に就ては全く遺址を求むることが不可能である。然るに金の中都の方は、實はこれもまた殆んど堙沒してしまつてゐるのであるが、猶ほ今日その遺址の存するものがあつて、大内の位置の大略とか、或は又、内城や外城、それを繞る濠などが僅ながらも求められる。

金に代つたのは言ふまでもなく蒙古の元であつた。

面白いことに、世祖忽必烈が最初に築造した上都—蒙疆ドロンノール—の遺址に立つて大内や内・外城の關係を觀ると頗る金の中都のそれに類似してゐる。上都を以て中都の模倣だと斷定

するのは氣が早過ぎるとしても、恐らく何等かの影響を受けてゐるに相違ないやうだ。

然し元が至元元年（西暦一二六四）愈〻北京の地を以て首都と奠めることになると、今度は金の都城をそのまま利用するのに滿足しなかつた。彼は、中都の內城外、東北の地をトして、新に築造するやうに命じたのである。その理由は、マルコ・ポーロの旅行記に依ると舊都は君主の命に從はなくなる運命にあるとの占星家の意見を聞かれた結果だと言つてゐる。恐らくさうしたことも一つの理由であつたであらうが、氣宇廣大な忽必烈にしてみれば新らしい帝都を築き、これに據つて當時の世界帝國をば統御して行かうとの野心がより强く、而も積極的に働きかけてゐたのであらう。

國號を元と稱したことなども、易經の「大哉乾元」と言ふ文句に基いたものので、かうした意味に依つて國號を定めたことは、未だ曾てなかつた例である。

その築造の經過を見ると、先づ宮殿を建て、宗廟を營み、宮城を築き、人民を移住せしめ、都城を繞らしたものである。支那の古典には、理想的な都城の規制として、南面に宮殿、北面に市場、東面に太廟、西面に社稷と言ふ言葉があるが、大都はこのことを意識的に現實化したものであつて、漢族の理想が、北族の手に實行された點を注意すべきであらう。

この他、大都と杭州とを結ぶ大運河の完成なども內陸を結ぶ驛傳制度、交易を容易ならしめる紙幣の發行等と共に、勿論何れもこの時代の獨創ではないのであるが、特記さる可き事柄である。かくて大都は當時の世界的都市たるの名に恥ぢない殷盛を示したものだつた。

元は中原に君臨すること一世紀にして、一介の乞食坊主から身を興した朱元璋に逐はれ、草原の故地に引上げてしまつた。朱元璋、卽ち洪武帝は當時南京を首都としたので、大都を占領せしめてもこれに據る考はなく、而も城の北部を縮小した。恐らく元にあつても北部は人口が稀薄であつて、明では防禦に却て不便を感じた結果であらう。それと同時に城壁の外部を煉瓦で包んでしまつた。實に此の時以前は城と云つても土築であつたのである。

明が北京を首都としたのは第三代永樂帝の時のことであつた。彼は永樂五年に着工し、愈〻同十九年に至つて遷都した。この時の詔に「賴に天下の臣民、心力を殫竭し、寒暑を冒し、風霜を渉り、事に趨き、功に赴き、勤勞して懈らず」とあるが、輪奐の美を極めた宮殿官衙城樓等が相次いで建築されその工費と工作と調度とを要したこと驚く可きものがあつた、と評されて居る。

城壁の南面が擴張されたのもこの時で、今日見るやうに內側を煉瓦で包んだのは降つて正統年間になつてではあるが、要するに北京の內城の完成は永樂帝の時にありと言つても差支へはない。

明代行はれた言葉に、南倭北虜と言ふのがある。それは中葉以後、海岸からは倭寇に苦しめられ、北方に於ては蒙古族の侵入に寧日のなかつたことを語るものである。勿論當時の蒙古族は既に强弩の末勢と言つた憾みが多いのはあるが、それでも未だ首都の警鐘を亂打せしめ、人々の顏色を奪ふに充分であつた。

嘉靖年間、外城の築造されたのはかうした結果である。豫定では內城全部圍んでしまふつもりであつたが、經費が無いので、止むを得ず、人口の最も稠密な南部のみに、築造することとした。それが今日の外城である。

普通、支那文化は漢唐に極まり、明の如きは宋元の敵ですらないやうに考へられてゐる。各時代にはそれぞれの個性的傾向があるのであるから、一概に論じ去ることは出來ないけれど、支那の文化はやはり舒々として進歩を續

けつつあつたものである。
　これを元の大都と明の北京の場合に比較してみるならば、前者は國際的色彩が濃厚で從つて華やかさは持つてゐるに相違ない。然し後者はこれに比較すると國粹的で、地味であるにも拘らず、內容に於いて採る可き所が多かつた。
　さて、明に代つた淸は前代の遺產をその儘借用して北京の主となつた。だがこれもまた、表面的のことであつて先づ第一に純朴簡素な精神を土臺とすることを忘れなかつたし、あの三十歲を過ぎた許りの事實上の統率者多爾袞は、直ちに內城を以て滿洲城とし、外城をば漢城とするとの確固たる方針を打ち立ててゐる。
　事實、八旗に屬する者以外には漢人は官吏と雖も內城に居住することが原則的に認められなかつた。これは、かの辮髮令の遂行と共に注目に値することである。
　純朴簡素と言つたが、宮廷の例にとつて見ても、宮女・宦官の數などは、明代に比較して遙かに少く、或は又、滿人の女子は纏足を行はないのが普通であつた。
　康熙以後、北京の西郊や熱河に離宮を營み、一年の過半以上を其處で暮されるやうになつた。恰も元が上都と大都の間を往復したのに似てゐるが、淸朝では滅亡に至るまで、元の天子のやうに喇嘛教に淫したりするやうな不始末はなかつたものである。
　咸豐十年の圓明園の燒打ちは、北京が遂に歐米勢力の圈外に超然たるを得ないことを確證するものであつたが、義和團事變に依る列强の北京占領は、その期間の短かさにも拘はらず、遂に未曾有の大影響を與へたと斷ずることが出來る。この結果、使館區域——東交民巷——が成立し、上海や天津に於けると同樣な傾向が現はれ出したのである。
　蓋し、義和團事變を以て淸朝は滅亡したと評してもよい。それにも拘らず更に十年の餘命が保たれたのは、この事變が列國の壓迫に反撥して起つたものであり、列國側にあつても、相互に牽制し合つた結果に外ならないと考へられる。
　さて、淸朝の滅亡は、たとへば、油がつきて靜かに燈火がゆらぎながら消え去つて行くのに似てゐるが、それは「滅滿興漢」の四字につきるわけのものではなかつた。舊體制の上に組織された國家、傳統的な天下國家觀が維持しきれなくなつたことをも意味してゐる。
　漢族と北族との二性に依つて構成された支那的世界がもつと廣い世界の一要素として合流しなければならなくなつて來たことをも意味してゐる。
　言葉を換へて言ふならば、朱壁黃甍の堂々たる紫禁城が、もはや、史蹟とならざるを得なくなつてしまつたのである。
　政治が儒教的な儀禮を以て最高とされてゐることが許されなくなつてしまつたのである。
　民國になつてからの二十餘年間を顧ると、混亂そのものであつた。これこそ半封建的な傳統と半植民地的條件とを負擔しながら進まねばならない苦悶の表徵であつたと評し得よう。それにも拘らず、支那は黃河の泥流の如き底力を持つて進んで行つた。
　北京もまた、この傾向から除外される譯のものでないことは言ふ迄もあるまい。勿論、國都南遷以後一時此處は停滯したかに見える。然し若し停滯しなければならなかつたとしても、決して復歸や反動が正しい途として辿られるものではなかつた。
　北京の歷史を顧るならば、除外例はあるにも拘らず全體として餘りに調子よく經過してゐる。それでこの簡略な記述にあたつて、自分は稍〻輕率に進步とか發展とか言ふ言葉を連發してはゐないかとおそれる。
　實際、一々の事實に就いて考へてみるならば、直ぐに、關係が非常に複雜してゐることを、認めざるを得ないのだ。
　若し何故に北京が都城として、かかる長い生命を持續し得たのかと自問してみるとする。すると答は、歷史的地理的條件が適してゐたためと簡單に應ぜられるであらう。然したださう言つたのみでは恐らく何人と雖も、わかつたやうで、わからないのであつて、地理的には地勢、水便、氣候、物產、交通等々に對する顧慮に及ばねばならないし、歷史的には政治、軍事、社會、經濟、文化等々、而もこのことが常に北京自體と全體との關係に於て理解されねばならないのである。
　さもあらばあれ、自分はかうした歷史的な一瞥を行ひ、そしてそれに依つて、現在と將來とに於ける北京に對して大いなる關心を持たざるを得ない。何故なれば人々に課せられつつある使命の愈〻重大なるを思ふとき、その發展が必ずや偉大なる創造性を伴ふものたるを期待してやまないからである。

（筆者は華北交通資業局資料室員）

北沙城考古記

（グラフ面參照）

水野清一

北沙城とだけ云つては分らないが、ここは蒙疆、察南の萬安縣。昨春まで柴溝堡と呼ばれてゐた驛の東方、約一里、東洋河を西に望んで、ちよつとした小高い部落、これが北沙城である。戸數にして三百八十戸、附近二十五部落の元締めで縣參事自慢の村公所が、嚴然と控へてゐる。

×

昨秋、九月二十三日、食料品と世帶道具一式を乘せたトラックで、張家口を出た私達は、雨雲の去來する中を、二時間近く走つて此の村に入つた。

村公所に入ると何事かと吏員一同が集つて來て、兎も角も「請坐(チンヅー)！」「喝(ホ)茶(チャー)！」のもてなしである。私は此の邊りの古蹟の調査に來たこと、此處に、村人が「假糧堆(ヂャリャンドイ)」と呼んでをる古墳といふか、土饅頭といふか、兎に角さう云ふものがある筈のことを說いて、其處へ案內してくれるやうに賴んだ。

村の門を出て、坂を下り、土橋を渡る。このあたりは楊柳のある水郷である。木の間から高粱畑、東洋河が見える。尙、部落を拔け、鐵道を東へ横切り、美しく實つた高粱畑の中に待望の古墳を見ることが出來た。

一つ、二つ、三つ、皆で八つ。

併し、我々は未だ萬安までに二つの河を越えなくてはならぬ。增水が氣になるので、大急ぎで設營の民家を選定して一と先づ萬安に向つた。

×

翌早朝、萬安驛で更に一行中の三君を迎へて、北沙城に向ひ、一同打ち揃つて、古墳の下検分をやることになつた。

前日見た八つの古墳は、線路の東南の東洋河の北岸にある。この東方、富農窰といふ部落の更に東にも六つの古墳がある。

以前は部落の中にも更に二つばかりあつたが、民國十八年かに河岸の崩壞で、內部があらはれ、村民の注意するところとなつて、遺物は今、萬全鎭にある。

青銅の洗、青銅の壺で、正しく漢代の銅器である。これが、そもそも萬安遺蹟が學界に注目されたはじめで、私は當時北京に留學してゐて、そのことを傳へ聞いてゐた。

今、その時の狀態を聞きたださうとして甲長を呼んだが、甲長は中年の溫厚さうな親父、口髯は黑々として、鄙には珍らしい品のある男であつた。

河に下り、河沿ひに造られた灌漑路の堤に立つて、その話を聞いた。

「此處ですよ。雨が降つて、大水が出て、河の岸がくづれて、物が出ました。大きな銅のかなだらひ、銅の壺、そして木材が澤山出ました。」

つまり漢代に多い木槨墓である。更に深さを問うてみると

「もり土が三丈。地下が三丈。合せて六丈」

といふ。

併し、河岸のたかさは、どう見ても二十尺もない。三十尺にすると、河床になる。辻褄は合はぬが、幾度聞いても「六丈」といふ。我々も六丈掘らねばならぬとすると、これはなかなかである。

×

選定が終つたので、その翌日から掘りはじめることにした。

富農窰西方の三基、第五號墳は岡崎第六號墳は小林、第七號墳は小野君擔任、稻生君と私とは遊擊といふことになる。人夫は大抵六十人ぐらゐ。ちやうど取り入れの眞最中とて、あつまりは惡かつた。

發掘が始ると、見る見るうちに高粱は刈り取られ、今迄代赭色の高粱に包まれてゐた古墳は、すつかり裸にむき出されて寒々となつた。

雲もない青空には低い外長城の稜線が浮ぶ。これは勿論、陰山である。西方、南洋河と西洋河との間に見える山が華山、なるほど小さいが華山に似て巍々たる山容だ。南の連山も低い。木の無いのは勿論だが、かなり上の方まで耕されてゐるのが見える。

×

一日雨が降つて、狹い宿舍に無聊をかこつてゐたが、何處からか稻生君がどつさり漢の瓦や土器片等を拾つて來た。「木高」の印のある土器片、同心圓の瓦當、菱形文の塼……正しく漢代である。場所は部落の西方、菜園のうちにある。

第一次の堆積層ではないが、瓦片、土器片は豐富である。ふと見ると、鄙

落の北に土手が殘つてゐる。更に板築も見え、漢の土城らしい。今殘つてゐるのは二百メートルそこそこだが、これに連續した現北沙城の北壁と、楊の並木とは、その遺址を暗示するものと見える。これが尙二三百メートル續いてゐる。そこで、宿舍に歸つて「水經注」を案ずるに、南洋河が陽內水、西洋河が于延水、東洋河が寧川水とすれば此の城址は漢の上谷郡西部都尉治縣と推定されるのである。併し、于延水といふ川は、かなり重要な川で、西洋河にあてるのに少し工合の悪いところもある。もし、東洋河にあてるとすれば寧川水は富農畜東の小川といふことになつて、この地は「水經注」の岡城に比定されようか。決定は後日に期待するより他はない。

×

土掘りは日々に進捗し、地下十數尺に至つたけれども何も出ない。何處が中心だか分らない。

寒さは日に加はり、畑のものは運び去られて、野良に働らく者は高粱の切株掘りか落葉蒐め。楊柳の葉も黃色くなつて、今にも氷も張らうかと思ふとそぞろに氣が急はしい。

×

五號墳は直徑二三メートルの竪穴が次々に現はれるが、墓壙には突き當らない。

竪穴には、漢代の灰色細席文土器が落ち込んでゐるから、漢代より後のものとは考へられぬし、漢代よりはるかに前のものとも言へない。正しく漢代のある時期に使用されたもので、住ひではないから、何かを貯藏する窖であらう。今でも、このあたりは、馬鈴薯を貯藏するのに、これに似た竪穴がある。

總數十數個、封土のそとまでひろがつてゐる。大小分布は任意であるが、掘りこんでいつたときの鍬あとは、歷歷として砂質の壁面に殘り恰も當時の工作を目のあたりに見る心地がする。

土器片には「木高」の字のあるものもあり、土城址と同時代のことがわかる。「木高」は恐らく此の器を造つた人のしるしであらう。

此處から新石器時代の黑褐色土器片石斧、石屑も出たが、これは包含層がない。漢代の生活層に破壞されて、わづかにポケット狀にあちこちにかたまつてゐるのみである。

それにしても、この五號墳の正體は分らない。竪穴ともり土の無關係なのはすぐ分つたが、それでは一體、古墳でないのか、古墳でなければ此のもり土は何なのか。正しく「假糧堆」として吾々を惱ましたのか。

このあたりでは、かうした古墳のもり土を「假糧堆」の名でよんでゐる。むかし、ある將軍が、土を盛つて糧秣とみせかけ、敵をあざむいたのだといふ。

この傳承は北支那に廣く行はれて、古墳だといふものは殆んどない。中から銅器が出ても、吾々が說明しても、「假糧堆」の傳承に影響はない。なかにはその將軍を唐代小說の女將軍、李樊花だといふものもをる。

×

六號墳では木槨があらはれ、博山爐と銅鼎が出た。木槨はくづれ、壓縮され、豫期に反して漆器などは痕迹しかとどめないが、銅器類はほぼ完全に續續と出た。東南の隅に大きな銅の壺があつた。それから南の側壁に添うて小さい鼎、小さい壺、方形の壺、扁平の壺、甑と釜、溫汁などが並んで出た。これは生前實用の銅器でなく、埋葬用の代用品、製作は至つて粗末である。しかし、こんなに揃つて出たことはまだないから、珍らしい。なほ、こはれてゐたが、銅の盤と洗と盂が並んでゐた。

盤はそそぎ水を受ける器、洗は洗面器、盂は飯碗といふことになつてゐるが、必ずしも確かとは云へない。

その間に鐵の墓鎭が四つ整然と並んでゐた。丁度きれの四隅か、案の四隅を押へたやうな恰好である。形は牛糞に似てゐるが、獸形に型取つたもの、恐らく墓の鎭めとして鄭重に納められたものと思ふ。

棺は二つ、東が男、西が女であるらしい。鏡は二面、一つは鏡奩のうちに面を下にしてあり、一つは棺の中に面を上にしてあつた。あまり上等ではないが文様から推せば前漢末にさかのぼる。

×

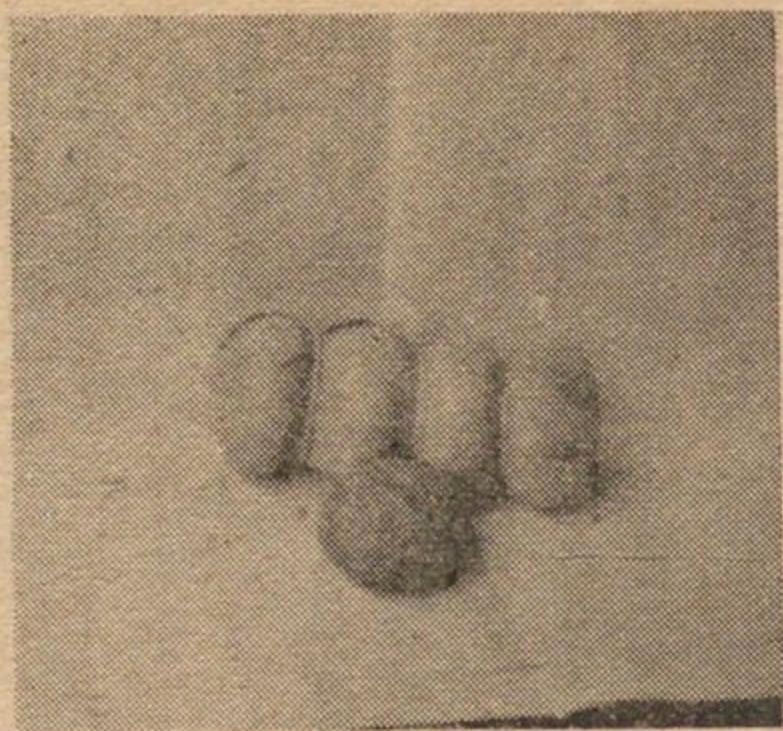
七號墳は遂に何ものも出なかつた。水が湧いて、小野君懸命の努力にも拘らず、ただ墓室の位置をつきとめ得たに止つた。

×

發掘が終つて墳丘の修復を濟したのが、十一月五日。翌六日、道士をよんで墓前にまつりをした。土民はこれを「謝土」といふ。決して古墳の供養とは思つてゐないのである。鉦と太鼓、笛と笙が乾ききつた冬野に響きわたり蕭條たる多景色のなかに、この數日、風のないのがなによりも倖であつた。

（筆者は東方文化研究所員）

支那茶の話

長谷川鐵子

支那人と茶

支那人の事を、茶の蟲と言ひます。實際、支那人はよくお茶を嗜む人種で上下貴賤の別なく一様にこれを愛好して、文字通り朝から晩までお茶を飲んでゐます。

馬四眼兒　眼鏡をかけた馬が
開茶館兒　茶店を開いた
一個茶壺　茶瓶は一つだけ
倆茶碗兒　茶碗は二つだけ

こんな童謠もあるやうに、勞働者や下層階級のためには、お茶專門の簡單な露店が何處にでもあります。

野菜の出盛り時に田舍に行くと、小川や溜りでそれらを洗つてゐる人達の傍には、判を押したやうに茶碗が置いてあります。又、商店の番頭等は帳場に茶瓶を置いて、暇さへあればお茶を飲んでをります。

職場に於てさへ總て此の通りですから、夕涼みの腰掛の側には必ず茶瓶が隨行してをり、芝居を見に行つてお茶を飲まない者は餘程の貧乏人とされてゐます。ですから劇場にはボーイを兼ねたお茶賣りが親方の支配の下に大勢立廻り、立派な一つの商賣をしてゐます。

劇場のことを「茶園」と呼ぶ位ですから推して知るべしです。

かうして一般に茶を嗜むところから一寸した街には必ず何時でもお茶が飲めるやうに專門の茶店があり、これを「茶館」と呼びます。茶館の「お茶博士」は、一日中お茶のサービスで暇人を一時間でも半日でも好きなだけ樂しませて呉れます。

暇人は、さんざん好きな話題に花を咲かせ、或は御持參の小鳥を自慢げに鳴かせたりして、お茶を腹一杯飲んでは暇をつぶします。さうして心附けとして幾錢かの茶代を拂つて引上げて行くのです。

こんなに支那の民衆性にピツタリ適合した雰圍氣が他にあるでせうか。そして又、お茶程支那萬人向の嗜好品があるでせうか。支那人にとつては最早お茶は單なる嗜好品ではなく、その生活と切り離すことの出來ない重要なものとなつてゐるのです。

支那茶の歴史

昔、今から約四千七百年程前、支那に神農といふ帝王があり、赭鞭でモロモロの草木を打ち、百草を嘗めて偶〻お茶なるものを發見したと本草綱目に書いてあります。これから推すと支那茶の歴史は大變古いことになります。

專門家の話によりますと、春秋の頃からそろそろ飲用に供せられ、漢代、六朝を經て益〻盛となり、遂に唐代、宋代の喫茶全盛期を現出するに至つたのださうです。

茶の原產地に就ては、印度説と南支説の二つがありますが、嗜好品として飲用に供せられたのは何と云つても支那が世界で最初と言ふのが定説です。序ながら、日本に茶の傳來したのは延暦年間（今から約千百年前）僧最澄が唐から茶の種子を持つて來たことに始まると言はれてゐます。

支那茶のイロイロ

西洋料理は三百餘種、日本料理は五百餘種、支那料理は殆んど無限だと言はれてをりますが、支那茶の名稱も亦支那料理ではないが、やはり千差萬別で一々枚擧に遑がありません。しかしその種類は茶樹そのものに相違があるのではなく、その採摘時期、製造方法生產地等の違ひにより區別されるのであります。其の內、製造方法による分類が最もよく知られてをり、それによると紅茶、綠茶、烏龍茶、花茶、磚茶及び雜茶の六つに大別することが出來ます。

紅茶、綠茶に就ては今更説明するまでもありませんが、紅茶は生葉を完全に醱酵させ、特殊の香氣を生じさせたもので、茶葉は黑褐色、茶汁は紅褐色で苦味とか澁味は少く、これに對して綠茶は茶葉を全然醱酵させぬため美し

い綠色を保ち、茶汁は黄色で多少の澁味を持つてゐます。支那の紅茶は主に輸出向であり、綠茶は輸出向にも國內消費向にも當てられます。

烏龍茶は、半醱酵茶であり、從つて形は紅茶に似て味は綠茶に類し、主に輸出向に當てられてゐます。

次に花茶とは、一名香片と呼ばれ、綠茶が南方人に好まれるのに對し、主に北方及び滿洲で愛用されます。その製法は鮮葉を蒸さず、生乾きにして心持ち醱酵させ輕い芳香を生じたものに香花を入れお茶の匂ひを良くします。茉莉の花を入れたものは茉莉香茶、珠蘭の花を入れたものは珠蘭香茶と呼び茶汁は淺紅色で澄んでをります。

磚茶は、特殊なお茶で、その形が磚（煉瓦）に似てゐるので一名、茶餅とも呼ばれます。普通長さは一尺近く、幅は五、六寸、厚さは五分から一寸くらゐもあり、丁度板のやうな形をしてゐます。これは茶屑を粉にして輕く蒸し、型で堅めたもので、十分乾燥してあるから、長い間（十年は愚か百年位は大丈夫だと言はれます）貯藏しても變質しない特質を持つてゐるので蒙古とかシベリヤ方面で好まれます。磚茶には紅茶から作つた紅磚茶と、綠茶から作つた綠磚茶とがあり、蒙古方面に行くのは專ら綠磚茶の方で、紅磚茶は高い紅茶が飲めないシベリヤのロシア人が多く用ひるやうです。では、何故かうして奇態なお茶が作られたかと言ふと、兎に角、輸送と深い關係のあることは容易に想像出來ます。

元來、茶の產地は南支ですから、第一に數百里、數千里の遠距離輸送に堪へねばなりません。あの廣漠たる蒙古の砂漠を橫切る繪畫的な風景は、主に磚茶を運ぶ隊商の群に他ならないとさへ言はれてゐる程で、駱駝や牛馬の背に搖られて行くからには餘程堅固でなくてはならぬし、また有名な黄塵萬丈の天候があるのですから、バラ茶にして置いたらホコリとお茶を一緒に飲むやうなことになるでせう。また蒙古人は遊牧地帶を轉々として居所を移さねばならぬし、いろいろの點から保存にも運搬にも便利なかうした形のものを必要としたのだといひます。

尙、蒙古人が實際此のお茶を飲むには先づこれを割木臼で搗くか小刀で削つて細かな粉末とし、水煮にして茶殼を除き、鹽と牛乳を混ぜ、再び煮沸して飲むのが普通です。彼等はこれを一日に二十杯から三十杯位は飲み、その外これに焙麥粉等を混ぜて食し、野菜の代用とヴイタミンの補給をも兼ねてゐるのです。またロシア人の方は、紅磚茶を削つて熱湯に投じ、砂糖を加へて飲むのです。

旅行や狩獵に出掛ける時は、その一片を紐に通して携行し、若し熱湯の無い時はそれを嚙んで水を飲み、お腹の中でお茶にするといふ奇妙な方法をとつてゐるさうです。

最後に雜茶とは、その名の示す通り製茶の際の碎葉、茶屑又は茶莖から作つた粗製のものです。

統計から見た支那茶

次に支那茶の統計を中心として生產と貿易の概況に就て觸れてみませう。

由來、支那は世界第一の產茶國と言はれ、從つてその產茶區域は本部十八省の內、十六省を占める廣範圍に亘つてをります。產地としては大體、北緯二十四度から二十六度以南の溫暖濕潤の地區を喜び、高度愈々高く、雲霧の多い程好適地といはれてゐます。故に揚子江以南が最も適し特に安徽、江西、湖南、湖北、浙江、福建の六省が最も盛んであります。この廣大な主產地を有する支那茶の生產額は、世界總產額の約半分を占めてゐると言はれ、最盛時は年七〇〇萬擔（ピクル）にも上りました。

尤も近年は事變のため非常な減產であることは容易に想像されます。次に支那茶の貿易は、英國の東印度會社が一六六〇年に支那茶を英國皇帝に獻上したことに端を發し、其の後逐年發展し、十九世紀の初頭迄は世界で需要される茶は殆んど支那から供給され、世界市場に於ける支那茶の地位は他に比肩するものがありませんでした。

處が其の後、十九世紀の末頃から、印度、セーロン、蘭印方面に茶が移植され且つ製茶業が勃興して來た爲に支那茶の地盤は次第に凋落し、一時稍々恢復してゐましたが、再び今次事變のため致命的打擊を受け、現在は最盛時年二〇〇萬擔の輸出額に對し、三〇萬擔にも達しない現狀であります。

更に支那に於ける茶の消費高は、生產高と貿易高を睨み合せて推算してみると、大體年四〇〇萬擔見當となります。而して支那の人口を四億とすれば一人當り一箇年消費高約一斤、卽ち日本の消費高〇・五斤の丁度二倍に當り、此の點から見ても如何にお茶が支那人に多く用ひられてゐるかが分ります。

北京の支那茶

北京のお茶は、現在安徽省のお茶が最も多く、浙江省杭州の綠茶もまた相當あります。以前は福建、江西省から

も多量に入つてゐましたが、現在は輸送困難、出廻り不足のため少量しか入らず、それに代つて日本から輸入された茶が下級の香片に相當用ひられてゐることが注目されます。

北京人の最も好むお茶は、香片で、どの茶莊でも一日賣上量の八割を占めてゐるさうです。主に一回分づつの包み賣りで、最低一錢から最高四〇錢位まであり、其の間最も多く出るのは一包五錢（一斤四圓）のであります。八錢以上の包には、豐臺や通州の茉莉花が一つづつ入れてあり、三〇錢の包になると新芽ばかりで香の良いこと、流石香茶の名を恥しめず、包紙の上から芳香が溢れてゐます。

綠茶は香片に比べ、稍〻高價なので、中流以上の家庭に愛用され、從つて包賣りは極めて僅かで、多く衡り賣りであります。紅茶は北京人には餘り好まれません。

尙、特殊なお茶として、雲南の普洱茶とか茶膏とか菊茶等がありますが、これは支那人でも知らぬ者が多い位であまり普及されてをりません。

北京の茶商は「〇〇茶莊」と立派な看板を掲げ、堂々たる店舗を構へてゐる店、「雨前」とか「舌雀」とか、その店の得意の茶名を布片に書いて下げてゐる店、雜貨舗兼茶舗等々を入れれば優に五百軒を數へるほどです。

その內、一流の茶商は二十數軒で、昔から北京の俗謠に「南城茶葉、北城水」とあるやうに、良い茶莊は多く前門外にあります。一流茶莊の賣上高は一日二千圓近くもあるさうです。

支那茶の入れ方と作法

支那茶を美味しく入れるにはシュンシュン煮滾つてゐる「開水」（お湯）でなければなりません。さて、お湯が充分に沸きましたら、先づ茶器をお湯で暖めます。それから茶の葉を入れ、湯をジュッと茶壺の半分程入れてそのまま一分間タップリほつて置きます。蓋は少しきつて置いた方が良いのです。そろそろ床しい香りが一杯に溢れましたら、頃は好しと再び熱湯を注ぎ足し之で美味しいお茶が入りました。お茶碗にナミナミと注ぎ、お客樣に淸楚な香りを賞して頂きませう。この際、全部注いで仕舞はず、半分殘して二度、三度熱湯を注ぎ足しても充分美味しく頂けます。又、人に依つては熱湯の上に茶の葉を入れ、蒸らして頂く方法もありますが、これは前と違つた柔かい味の出る點が特徵です。

大體、支那程お茶をよく出すところはありません。來客があれば何はさて置き、先づお茶を出します。從つて、私達も支那茶の作法を一通り知らねばなりません。さて、香り高いお茶を出された時は、立上るなり手を添へて受取る恰好をすべきです。但しそれは相手により、ボーイならば片手、主人ならば兩手、また『您請喝茶』と言葉をかけられた時は、客もそれに應じ『謝謝』と言ふべきです。若し日本人が何時もするやうに坐したままそのサービスを受ける時は、支那人は非常に傲慢な人だと思ふでせう。

又、お茶は主人の出ない前に出ても主人がすすめない前に飮むのは失禮に當ります。但し主人は必ず直ぐすすめるものですが、若しその前に飮みたい時は、茶碗を持つて『您喝您喝』と逆に言葉をかければ良いのです。

お茶を頂いて、お茶碗が空になると主人は直ぐ注ぎ足して與れます。又飮むと又注ぎます。主人の方はこれが禮儀であり、お茶碗を空にして置けば失禮に當るので、いくら要らぬと言つても必ず注ぎます。若しそれを知らず、日本流に、折角注いで與れたのだからと頂いて居れば切りなく、仕舞ひにはお茶攻めに逢はされることでせう。

（筆者は華北交通書業局員）

山東の青帮を訪ねて

原田正己

江南の粟米を河海によつて北京に運送することは、既に元の頃からあつたやうであるが、明清と引き續いて更に運河の開鑿擴張が行はれ、輸送される粟米の量も次第に增加して、清朝では毎年數百萬石が官倉に藏されたといはれてゐる。

かかる漕運の業は、たとへ官府の權勢を以てしても決して容易でなかつたであらう。

歴代の上諭や漕臣の上奏文を見ると漕運の極めて重要であり、困難でもあつたことがうかがはれる。漕務の督促に當る漕官の苦勞も、運河に棹す運丁の仕事も大變であつたと思はれる。

而も多數の穀米を輸送するのであるから、そこには盜難も考へられるし、若し漕官運丁の人選が所を得なかつたならば、漕糧の私費も起り得ることなのである。ところが清朝初期に、かうした漕糧の難事を引受けた團體が、民間からも起り、而もそれが水滸傳に見られるやうな四海兄弟の思想で結びつけられてゐた。今日、青帮と云はれるものがそれである。

さて、青帮は今迄種々な名稱で呼ばれた。安清帮と云はれることもあるがこれは清朝の政策を助けて、これを安きに置くといふ意だとも、運河に棹して行く日々の平安清吉を念ずるものだともいはれ、また青帮の系譜、二十四字輩、清靜道德文成佛法仁倫智慧本來自信元明興禮大通悟學の第一字「淸」に由來するものとも云はれてゐる。

蕭一山の近代祕密社會史料には、慶帮といふ文字もあてられてゐて、清初に於ける漢人の結社哥老會の一員、潘慶が組織したところから、かう呼ばれたと述べられてゐる。

青帮はまた在家裡とも云はれてゐるが、この語の由來は清朝末に漕運のことが主として海路によつて行はれ、その仕事も政府の兵餉といふ官のつかさどるところとなり、自ら彼等の漕運の業が廢止されたときに、彼等は別の職業に就くことになつたが、祖師の香烟を絶やさず、またその義氣を永久に傳へるために、新に徒を收めて「家に在つて」帮の精神を存續したといふところにあるらしい。

今日、運河の河筋では青帮といふ名稱で呼ばれるが、滿洲一帶でこの名稱が用ひられるのは、かうしたところにこの語の由來があるからであらう。

青帮の名は、紅帮に對して云はれたことは人の知るところである。

さて、青帮の起原に就ては種々の傳說がある。青帮員の經典で、また帮員たるの證明書でもある小册子があつて『義氣千秋』とも『道義眞詮』とも呼ばれ、最近北京からも『道義指南』といふ名稱で出版されたが、古くは『萬善同歸』『通漕』『海底』などとも云はれた。此の種の書物によると、漕運の始祖を、明代の金清源といふ人物としてゐるが、第二祖羅靜卿と、第三祖陸睦とについて種々な傳說が作られてゐる。

『道義指南』によると羅祖は甘肅の人、明、萬曆の頃に生れ、二十歲で進士となり、戸部尙書の職にも就いた。天啓三年、西域反亂の際に大いに功績があつたが、大臣魏忠賢といふものに

嫉まれて、獄につながれ、天牢にあること十八年に及び、その間、經卷を誦讀して眞經六册に註を加へた。偶〻、その時、西域から使臣が來て、天書三卷をたづさへ、その書の內容を明らかにするものがあれば、西域は長く屬國としてつかへるといひ、それが解けなければ却つて西域に貢を納めよといふやうな難題をもたらした。

誰もその書を明らかにする者がないので、天子はわざわざこれを牢中の羅祖に聞いた。羅祖は、午門外に於て高臺に上り、使臣に貢書を獻ぜしめて、その書が彼の註したものの一部であり殘部は杭州武林門外の八寶琉璃井內の石匣にをさめてあると述べた。天子は使者をその場所へやつたところが、果して三册の書を得た。

使臣は驚き歸り、羅祖は眞經六册を天子に獻じたとある。その後、羅祖は官を辭して、紫霞山どいふ山に上り、金祖について修業したが、清朝順治の頃の苗蠻の亂の平定にも大いに貢獻したと云はれてゐる。

靑幇の傳說で、もう一つ興味のあるのは羅祖と陸祖との關係の話である。

羅祖の苗蠻を降伏させる有樣を見た原任總戎の陸陸は、その德を慕つて、紫霞山に赴いたが、羅祖は門を堅く閉して出ず、やがて一童が出て來て、洞中の祖の法諭を傳へ、

爾跪きて紅雪腰に齊しく、蘆芽膝を
穿つに至るを待てその時、祖の面を
見るを得ん。

と云ひ殘して洞へ入つた。丁度、時は臘月で天地は嚴寒、防寒衣を持たぬ陸祖は田中餘剩の稻をとり、身體を裹んだが、その夜から大雪が降り、飢餓の爲に陸祖はしばらく凍え僵れて氣絕してしまつた。天が明けて雪は止み、林間の群鳥が食を求めて陸祖のかけてゐる稻を啄み、肌をつつき肉を食つた。

鮮血淋漓、流れて腰間にあり、

積雪の上、遂に染りて紅色となる。

と述べられてある。また同時に、膝は潰爛して、地から鑽出した蘆芽に突きさされてゐた。

陸祖は息を吹きかへして、自分の姿を見、羅祖の法諭の應驗があつたことを喜び、遂に弟子になることが出來たのである。陸祖も羅祖と同樣に康熙の初めに起つた回兵の亂に際して、これを北京城から逐ひ拂つた。官を避けて五臺山靑石山啷王廟に行き、修業したと傳へられてゐる。

陸祖が此處で得た弟子が翁、錢、潘の三祖である。三祖は、山東省靑州舞山の紫宵洞に行き、苦行修練したが、その頃、淸朝は、皇榜を午門外に揭げて、漕運のことに當る義士を募集してゐた。陸祖の命に從つて三祖は北京に至り漕運の業を引受けることになつたのである。三祖は多くの徒を集めて、雍正四年を作り、多くの船隻と糧倉とに運糧を開始した。また祖師の香烟を長く存續させるために、杭州に家廟一座を建て、漕運に必要な幇規と儀法とを作つた。

その後、三祖の功績大いにあがつたが、翁、錢二祖は早くも死亡し、潘祖は乾隆十三年、鳳林間で烈風に遭つて死亡したと傳へられる。

潘祖は翁、錢二祖に比較して特別の取扱ひを受けてゐる。たとへば、康熙帝が三祖を接見した時、特に潘祖の容貌魁偉なのを見て、これを正統としたこと、羅祖が傳法の際に潘祖だけに謂ゆる六字の大法を傳へたことなどで分る。

以上は三祖漕運開始までの靑幇の傳說を述べたものである。

さて、蕭一山の說によると、靑幇は元來、反滿復漢を主義とする、天地會の流れを汲む哥老會から分立したと云はれてゐる。そしてその分立の動機は潘慶といふ人物が私鹽を販賣する魁頭で、もともと私鹽販賣を取締る湘勇と

してゐ哥老會から離れて、別に旗幟を立てたところにあるとしてゐる。

青帮がもと鹽梟であつたかどうかは明らかでないが、やはり河か、河海の沿岸で特別の業を營んでゐたものらしい。若し潘慶が青帮を興し、それが潘德林のことであるならば、前述の羅祖陸祖等の傳説は、青帮成立以前、即ち天地會、哥老會のことと聯關を持つことにならう。天地會の傳説の中にも、外夷の入寇を身を挺して救つた少林寺の僧の物語があり、また青帮が達磨を始祖の第一に數へるのも、この物語とつながりがあるかも知れぬ。

天地會、哥老會が反滿復漢の意圖を持つのに、青帮はむしろ清朝を助けたので、その意味からああした改作が行はれたと見るべきであらうか。

その後、太平天國の亂後、しばらく運糧は停止されたが、彼等は光緒十二年、再び帮を開いて開封、濟寧、德州等に置かれた督糧衙署に屬して漕運に從事し、義和團の亂の際には、遠く西安まで糧食を運んだと云はれてゐる。

民國以來、青帮が軍閥と結んで大いに力のあつたことは、よく人の知るところである。近年になつても、青帮の一部は、やはり運輸方面の仕事にたづさはり、天津の碼頭などに活動したらしい。

○

今春、自分は山東を旅行して、青帮の二三の老師に會ひ、種々と話を聞くことが出來た。

濟南では、錢培業老人を訪ねたが、彼は上品で極めて溫厚な人であつた。聞けば、同地の青帮員の人望を一身に集めてゐるとのことである。前述の三祖の一人、錢祖が同じ濟南府の人であるのも面白い一致である。

錢老人の語るところによると、現在青帮は家に居ては念佛誦經し、外では治安と防共に盡すといひ、杭州の家廟のことを聞くと、未だ誰も家廟を見た者はない。青帮の神は、自分の身上にあるのだと答へた。

山東には、いま安清道義會といふものがあり、濟南に總會があつて、省内六十縣がこの青帮員に合流して、各縣には分會、その下に幾つかの支會が置かれてゐる。現在、青帮員の數は山東だけで五十萬人にも及ぶとのことで、濟南だけでも會に入つたものが五千人もあるさうである。

次に山東に於ける運河の中心地、濟寧に行く。此處の道義會長、吳亭老師は特に下層階級のものに父の如く慕はれて、青帮の義氣を身を以て示してゐるやうな人であつた。

重病で臥してゐたが、清朝末期の版と思はれる『通漕全序』『通漕寶鑑』の二書を、わざわざ出して見せてくれた。この二書の序には、青帮の主なる仕事として、漕糧と養兵と治國とが擧げられてゐたやうに記憶してゐる。

濟寧の道義會には拜殿があり、翁、錢、潘の三祖と、王少爺の神位が置かれてあり、月初めに行ふ入帮式には、青帮十二祖の神位が皆並べられるとのことである。

山東の旅行の間に、しばしば青帮員の胸に小さいメダルが下げられてゐるのを見受けた。山脈を背景に、運河に帆船が浮び、五行八德と記した石碑が畫かれ、上に義氣千秋の文字が刻まれてゐるやうに思ふ。

會員證には、恪遵祖訓とか、永守道義とかのスローガンと共に日華親善、維持和平の文字も見受けられた。

青帮の種々な帮規や、彼等の結社の基礎をなしてゐる義氣が、今でも嚴重に守られてゐるかどうかは明らかではないが、今でもやはり支那民衆の間に隱れた勢力を持つてゐるもののやうに思はれるのである。

（筆者は外務省留學生）

可園雜記

加藤新吉

三月二十一日、春分。煖爐をとり外す。一冬使つた亞鉛引鐵板の煙突は半は腐つてゐる。徑四寸、長さ三尺の筒一本、三年前に一圓二十錢、去年四圓八十錢、一冬には何十圓か腐らせる譯である。一本六七十錢高にはつくが三年はもつといふので試みに作らせた銅板の煙突も、石炭にタールや硫黄分が多いのと板が薄かつたのとで、矢張り腐蝕がひどい。北支自動車燃料の石炭への切替はだから難しいのである。

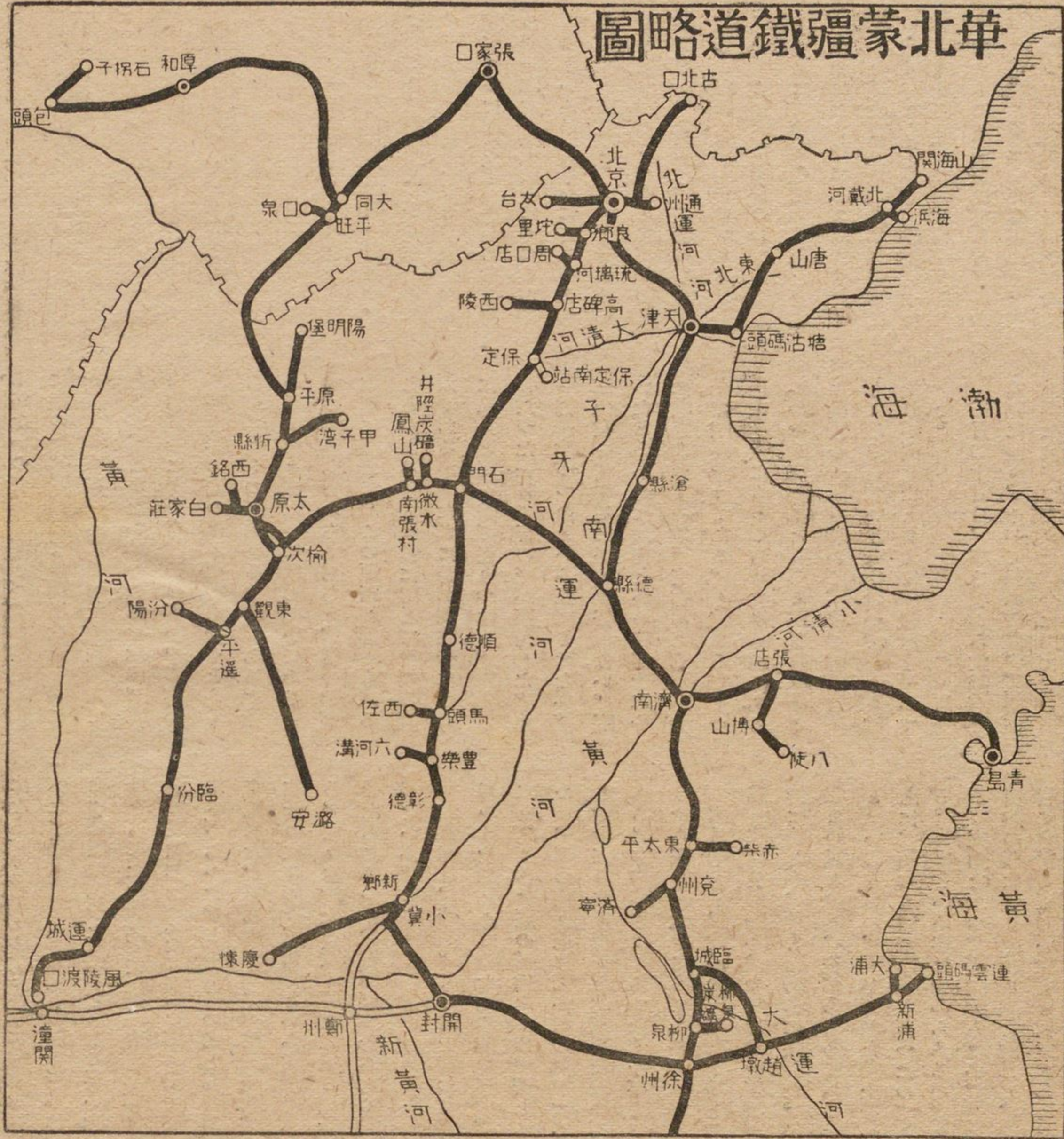
冬ぢゆうに焚いた石炭の粉が山をなした。それに有煙炭の粉と黄土とをまぜ水でこねて丸い球にして乾かす。それが煤球兒(メイチウル)、臺所の燃料である。賴めば商人が來て作りもするし、粉炭をやればそれに相應する製品を運んでくる。今年はボーイの王(ワン)が作つてみるといふので一車三圓の黄土を三車買つた。王は暇を作つては石炭バケツの中で少しづつこねた。丸める時に使ふ平らなざるがないので、北海道バタの空罐を型に使つた。絨氈の海外輸出杜絶と共に失業してころげ込んで來た絨氈職人であるが、なかなか頭のよさを示す。

柳が急に青む。院子の丁香や海棠の新芽も春の陽のなかでむくむくとふくらんでゆくのが見えるやうである。雀の群が枝々で大いにはしやいでゐる。犬の餌があるからであらう、雀の群が次第に殖えて、この頃百羽近くも來ることがある。犬は雀に對しては頗る寛大であるが、たまに烏が御馳走になりに來ると凄い勢で怒りつける。

たつた一日で杏の花が滿開した。梅一輪一輪づつのといふ長閑さはない。三分咲を賞するといふ餘裕はない。咲いたといふ時には花といふ花が十二分に咲ききつてゐる。支那らしくない性急な咲きやうである。と、まるでその花を一氣にもみくちやにする爲であるかのやうに突風と黄塵とが襲ふ。今年は開花後一兩日靜かで、風の神が居睡してゐるらしいと云ひ合つてゐたら、それが聞えたと見えて、猛然とやつてきた。

三月二十五日、ひる頃から太陽が黄銅色に變り、やがて視界暗澹、黄塵が上空に擴がつてきた。今に風になるから退けたら急いで歸らないときなこ餅になる、と新しく來た人達に注意を與へた。果して日暮突風、可園の老木は唸り黄塵は院子に渦卷いてもの凄い光景を呈した。密閉した室内も土臭芬々曾て經驗した倫敦の濃霧を想ひ出す不快さであつた。しかもこの風と塵は徹宵荒れた。翌朝は室内すべて黄土色、院子の吹き溜など何分といふ堆積である。太々(タイタイ)は黄土を買ふのを二三日見合せたらよかつた、と阿媽(アマ)が珍らしく戲談をいふ。

四月五日、清明。この日を待つて冬ぢゆう仕舞込んでゐた植木鉢を出す。木を植ゑる。墓の掃除をする。若しこの日、墓の盛り土を掃ふ程の風が吹くと四十五日吹き續くと北京人は云ひ傳へる。去年がさうであつた。今年もどうやら長々と吹きさうである。

四月十五日、院子の海棠と丁香と眞盛り。植ゑて三年、今年は白の丁香が特に美しく、枝もたわわに咲いた。が毎日の風と黄塵、花がみじめである。とはいふものの、風が齎した黄土層の上に、植物も黄帝の裔も蔓つたのである。霾(つちふる)といふ字は昔からあるのである。文句を云つても始まらない。この自然の裡に強く生きる途を發見し、環境に應ずる正しい生活を樹立することである。（筆者は華北交通資業局長）

華北蒙疆鐵道

京山線（北京―山海關）
京古線（東便門―古北口）
京漢線（西便門―小冀）
津浦線（天津北站―蚌埠）
京包線（豐臺―包頭）
膠濟線（青島―濟南）
石德線（石門―德縣）
石太線（石門―太原）
同蒲線（大同―蒲州）
懷慶線（新鄉―懷慶）
隴海線（連雲碼頭―開封）

昭和十七年五月十五日印刷納本
昭和十七年六月一日發行

六月號
（毎月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 古川一郎
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替 東京六四二二三番 一四一五番
電話九段(33)三一三四四番
會員登錄番號 一二一六五〇八番

一册定價㊕三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十七年五月十五日印刷納本　昭和十七年六月一日發行（毎月一回一日發行）第三十七號

V.B1

胃腸疲勞
榮養

強力メタボリン錠

ビタミンB1の不足は

胃及び腸の活動力を抵下せしめ、各筋肉の無力狀態を來し、食慾不振、便秘の原因となる。

食慾不振となれば假令ビタミンB1に富む食物を攝食しても吸收が不良となり、益々ビタミンB1缺乏の度を高め、消化器管は疲勞のため、各種の胃腸疾患を惹起す。

かゝる場合高單位のビタミンB1劑の投與は先づ根本的に胃腸組織を賦活し、筋肉の緊張を調整してその過勞を恢復し、消化液の分泌を亢めて食慾を旺盛ならしめ、榮養素の吸收を良好ならしめて所期の目的を達す。

【適應症】　胃腸無力症、食慾不振　肺結核・肋膜炎等の消耗性疾患時、脚氣、疲勞の恢復等

V・B1含有量一錠中〇・五ミリグラム

★一〇〇錠　三〇〇錠

製造發賣元　大阪　株式會社　武田長兵衛商店

2(2)147

北支（停）定價三十錢